

大日本地震史料

卷之十三

弘化四年三月二十四日信州地震ノ二

〔鎌原洞山地震記事〕

善光寺地震取調材料六冊ノ内、甲、文部省震災豫防調査會所藏

○本書ハ松代藩家老鎌原洞山ノ記述シタルモノナリ、洞山ハ前ノ縣會議長鎌原忠次郎ノ養祖父ニテ、佐久間象山ハ、漢籍ヲ洞山ニ學ビタリト云フ、本書、モト三冊ニ分テリ、

五月三日、御用番阿部伊勢守様江前日被指出候處、御願書へ御願之通御附札相濟、公用人山岡衛士を以て被成御渡候、私儀參勤時節之儀、奉伺候所、當六月中、參府可仕旨被仰出、難有仕合奉存候、然處、追々御届申上候通、去月廿四日夜、未曾有之大地震に而、城内始、家中、城下町共、破損所并潰家等數多有之、別而領分村々之儀は、潰家、死失人等夥敷、其上田畑、道路地面震裂、土砂、泥水等吹出、殊に山中筋は、山拔崩覆等に而、一村人畜共、地中江押埋候村々も不少、就中、更級郡山平林村之内山拔崩、犀川押埋、水流堰留、數日相湛、水嵩貳○見集錄、三三作ル拾丈餘に及候間、川邊村、水中に相成申、尤も岩石に而、數十町之間堰留候儀に付、水勢に而は難押切樣子に相聞候所、去十三日夕、存外一時に押破り、岩石一同數十丈之水押出、流末、川中島一

圓に致充滿、人家は尙更、田畑共押流、或は河原に相成、其外近邊村々、下續川添村方流失、又は泥水押入候儀夥敷、且又數十日、水中に相成居候山中村々之儀、水は引候得とも、居家、田畑共不殘押流、其上川邊道缺崩候場所數○見集錄、十ノ字アリ、町有之、重々之災害に而、親族を失ひ、居家、家財、耕作諸道具、剩田畑迄も致亡失、悲嘆途方に暮罷在候領民共、幾千萬共難申、差向夫食に差支、住居に迷、農業之心得等は、毛頭無之爲體に付、所々致手分、役人共指出、炊出、又は小屋懸等之手當申付、飢渴并雨露之凌等、專爲取計候得とも、右は全一時之救方而已之儀にて、此上假成にも居家取繕、耕作諸道具等取整、田畑開發、道路普請等爲致候には、不容易儀、乍去暫時も難捨置、何様にも早速取復方手段可仕儀に候へども、領内一體之儀にて、容易に行届兼、殊に追々田方仕付專の時節に相成候得共、右之次第にて、中々耕作に取懸り候始末に至兼候得ば、收納は勿論、銘々夫食之目當無之、自然と人氣に拘り候間、如何様之心得違、異變等、可生茂難計、深く心痛仕候、此上精々救方、并田畑開發手段、可申付候得共、家來のみ任置候ては、領民共氣向にも拘り、取復方果敢取申間敷、右に付ては、領内村々少も取復、人氣穩に相成、耕作營み候形勢に至候迄

(衍カ)
には、在所に罷在、救方手宛筋は勿論、人心引立候様、幾重にも相勵み、且は取締等、萬端指圖仕度奉存候、依之可相成儀に御座候者、格別之御仁惠を以て、當秋中迄、參府御用捨被成下候様仕度奉願候、以上、

四月廿一日

七月九日御届、御用番牧野備前守様、御勝手阿部伊勢守様江、
(古カ)
御留守居故田繁之丞持參、被成御落手候、

私在所信州松代、先達追々御届申上候通、當三月廿四日夜大地震以來、度々の震動にて、城内并家中、在、居家、其外破潰、人馬死失、田畑損毛、且山崩、犀川堰留湛水、數十ヶ村、水中に相成居候處、同四月十三日、右場所一時に押破埴科、更科、水内、高井、右四郡之内八十ヶ村、一圓洪水にて、猶又居家、其外流失、流死人、田畑損亡等、委細相糺候所、

一本丸圍塀八拾間倒、
一二丸馬出櫓壹ヶ所大破、
一同所圍塀九拾四間三尺倒、
一三丸櫓壹ヶ所潰、
一同所圍塀廿七間倒、
一本丸、二丸、三丸共、門并櫓、諸番所屋根瓦震落、壁破損、

一住居向大破、并圍塀拾四間倒、
一番所一ヶ所潰、
一米藏壹棟潰、
一同九棟破損、
一城地圍水除土堤五拾貳間崩、
一厩壹棟大破、
一學問所壹ヶ所大破、
家中之分、
一居家潰參拾八軒、
一同半潰貳百八拾六軒、
一同大破六百五拾四軒、
一門潰九ヶ所、
一同半潰拾六ヶ所、
一同大破五拾三ヶ所、
一土藏潰三拾五棟、
一同半潰百拾壹棟、
一同大破百七拾六棟、
一物置潰百貳棟、
一同大破貳百八拾棟、
一同半潰八拾七棟、

一圍塀倒千七百十二間餘、
城下町之分、

一居家潰百七拾五軒、

一居家半潰百五軒、

一同大破百四拾四軒、

一土藏潰三拾九棟、

一同半潰貳拾九棟、

一同大破六拾棟、

一物置潰四拾壹棟、

一同半潰三拾四棟、

一同大破三拾棟、

一酒造藏潰貳棟、

一同半潰壹棟、

一社潰貳ヶ所、

一御朱印地寺院、本堂大破、庫裡潰、壹ヶ寺、

一同半潰壹ヶ寺、

一同大破三ヶ寺、

一寺院潰壹ヶ寺、

一同大破九ヶ寺、

一壓死三十二人、

内男十一人、
女二十一人、

一怪我人二十七人、

内男十三人、
女十四人、

但渡世差障候程之者、無之、

一高七萬千六百四拾五石餘、本田共、新田共、

内

地震之節、

三萬貳千八百五石餘、

村數百五拾壹ヶ村、

内

壹萬八拾五石餘、

田方、

貳萬貳千七百貳拾石餘、

畑方、

洪水之節、

三萬八千八百四拾石餘、

村數八十ヶ所、

内

貳萬七千九百拾三石餘、

田方、

壹萬九百貳拾七石餘、

畑方、

右者、山拔、耕地覆、床違、并犀川湛水入之村々、且右湛水
押破、大石等耕地押出候等之大荒村々、凡高に御座候、永
荒に可相成處、多相見申候、

一用水堤拔崩、并大破、大小百四拾六ヶ所、

一用水堰大破、并磐石、砂、泥入、押埋缺崩、延長拾貳萬八千六百四拾貳間餘、

內

九萬七千六百六拾間餘、地震之節、

三萬千四百八拾貳間餘、洪水之節、

一山拔崩、大小四萬千五拾壹ヶ所、

內

四萬九百七拾九ヶ所、地震之節、

七拾貳ヶ所、洪水之節、

一山拔崩、堰留水湛、大小五拾壹ヶ所、

但堀割候分、其外共、水路相附申候、

一往來道筋、地裂、拔崩、流破、延長拾六萬四千七百四拾壹間餘、

餘、

內

拾三萬千貳百五拾貳間、地震之節、

三萬三千四百八拾九間餘、洪水之節、

一橋大小落損、流失等、三百七拾三ヶ所、

內

百拾三ヶ所、地震之節、

貳百六拾ヶ所、洪水之節、

但久米路橋共、

一同破損百八拾壹ヶ所、

但洪水之節、

一犀川、千曲川筋、國役御普請所、土堤流失、延長二千九百四拾七間、

但右同斷、

一同石積流失、延長八拾間、

但右同斷、

(川脫力)

一犀千曲川、其外川除土堤、震崩流失、延長貳萬九千三拾間餘、

內

四千六百七拾四間餘、地震之節、

貳萬四千三百五拾六間餘、洪水之節、

一同石積流失、延長貳千九百間餘、

但洪水之節、

一同菱牛石積流失、三百八ヶ所、

但右同斷、

一同石杵、合掌杵流失、千貳百三拾六組、

但右同斷、

(菱力)

(失脫力)

一同岸園、打杭、笈牛差出流、八千四百四拾五間、

但右同斷、

一同急難除岸圍、水勿流失、四百七拾七ヶ所、

但右同斷、

一用水揚口水門、底樋、震潰、大破、流失、貳拾四ヶ所、

内

拾ヶ所、

地震之節、

拾四ヶ所、

洪水之節、

一船大小破損、流失、貳拾五艘、

内

四艘、

地震之節、

貳拾壹艘、

洪水之節、

一流木參萬八千五百壹本、

但洪水之節、

在方之分、

一居家潰九千三百三拾七軒、

内

參百軒、

山拔、土中江埋、

貳百四拾三軒、

潰之上、燒失、

貳百軒、

潰、半燒、湛水入之上流失、

六百軒、

潰、半潰、湛水にて浮出之上流失、

千四拾壹軒、

潰、半潰之處、洪水にて流失、

六百貳拾四軒、

半潰之處、洪水之爲め潰、

六千三百貳拾三軒、

潰、

一同半潰貳千八百貳軒、

一同大破三千百貳拾軒、

一同石砂泥水入貳千五百七軒、

但洪水之節、

一土藏潰千七百五拾七棟、

内

百貳拾九棟、

山拔、土中江埋、

八拾四棟、

潰之上、湛水入、

百拾棟、

同斷之上、燒失、

貳百拾四棟、

潰、半潰之處、洪水にて流失、

千貳百貳拾棟、

潰、

一同半潰五百八拾五棟、

一同大破百七棟、

一同石砂泥水入三百貳拾貳棟、

但洪水之節、

一物置潰六千四百八拾八棟、

内

震災豫防調査報告第四十六號

乙

貳百貳拾四棟、

山拔、土中江埋、

三百拾八棟、

潰、半潰之處、燒失、

千三百貳拾七棟、

同洪水にて流失、

百九拾五棟、

半潰、破損の處、洪水にて潰、

六拾貳棟、

潰之上、水入、

四千貳拾貳棟、

潰、

一同半潰九百七拾四棟、

内

六拾三棟、

半潰之處、洪水之節水入、

一同石砂泥水入六百三拾貳棟、

但洪水之節、

一酒造藏潰貳拾三棟、

内

四棟、

潰、湛水入之上流失、

拾四棟、

潰、

五棟、

半潰之處、洪水にて潰、

一酒造藏半潰貳棟、

一同大破壹棟、

一水車屋潰百九棟、

内

七棟、

山拔、土中江埋、

五棟、

潰之上、燒失、

三棟、

同湛水入、

貳拾五棟、

潰、半潰之處、洪水之節流失、

拾貳棟、

半潰大破之處、洪水之節潰、

五拾七棟、

潰、

一社倉潰七拾七棟、

内

七棟、

山拔、土中江埋、

三棟、

潰之上燒失、

拾八棟、

潰、半潰之處、洪水にて流失、

四拾九棟、

潰、

一同半潰四拾七棟、

一高札場潰拾八ヶ所、

内

拾五ヶ所、

潰、

三ヶ所、

大破之處、洪水之節流失、

一同燒失貳ヶ所、

一同大破九ヶ所、

一口留番所潰九ヶ所、

内

壹ヶ所、

潰之上、湛水入、

八ヶ所、

潰、

一同大破五ヶ所、

一社潰百四拾七ヶ所、

内

拾五ヶ所、

山拔、土中江埋、

拾壹ヶ所、

潰之上、湛水入、

六ヶ所、

同焼失、

三十七ヶ所、

潰、半潰、大破之處、洪水之節流失、

貳拾貳ヶ所、

半潰之處、洪水之節潰、

五拾六ヶ所、

潰、

一同大破八百貳拾五ヶ所、

一御朱印地寺院潰八ヶ寺、

内

壹ヶ寺、

潰之上、地裂、地中江埋、

壹ヶ寺、

同湛水入、

六ヶ寺、

潰、

一同半潰貳ヶ寺、

一同大破六ヶ寺、

内

五ヶ寺、

地震之節、

壹ヶ寺、

洪水之節、

一寺院潰八十ヶ寺、

内

三ヶ寺、

山拔、土中江埋、

五ヶ寺、

潰之上、焼失、

拾三ヶ寺、

同水入、

八ヶ寺、

大破之處、洪水之節流失、

五拾壹ヶ寺、

潰、

一同半潰貳拾壹ヶ寺、

一同大破三拾五ヶ寺、

一諸堂潰貳百四拾壹ヶ所、

内

拾ヶ所、

山拔、土中江埋、

壹ヶ所、

潰之上、流失、

壹ヶ所、

同湛水入、

三拾三ヶ所、

同流失、

貳ヶ所、

同洪水之節水入、

百七拾九ヶ所、

潰、

震災豫防調査報告第四十六號

乙

貳ヶ所、洪水之節潰、

拾三ヶ所、同流失、

一同半潰五拾五ヶ所、

内

四拾九ヶ所、地震之節、

六ヶ所、洪水之節、

一同大破五百五拾ヶ所、

一同石砂泥水入三拾八ヶ所、

但洪水之節、

一壓死流死貳千五百八拾五人、

内

一男千貳百貳拾八人、

内

千貳拾七人、地震之節壓死、

百九拾五人、山拔、山中江埋、死骸相見不申候、

六人、洪水之節流死、

一女千三百四拾五人、

内

千百貳拾七人、地震之節壓死、

貳百貳人、山拔、土中江埋、死骸相見不申候、

拾六人、洪水之節流死、

一社人貳人、地震之壓死、
(節脱力)

一僧十人、右同斷、

内

壹人、山拔、土中江埋、死骸相見不申候、

一怪我貳千貳百六拾貳人、

内

一男千拾壹人、地震之節、

内

拾人、往々農業渡世、難相成分、

一女千貳百五拾壹人、地震之節、

内

拾五人、往々農業渡世、難相成分、

一穢多壓死七拾八人、

内

一男四拾三人、地震之節、

内

貳拾七人、山拔、土中江埋、死骸相見不申候、

一女三拾五人、地震之節、

内

貳拾人、

山拔、土中へ埋、死骸相見不申候、

一斃牛馬貳百六拾七疋、

内

牛四疋、

馬貳百六拾三疋、

内

三拾六疋、

山拔、土中江埋、死骸相見不申候、

右之通御座候、尤地震之儀は、領内一統之儀御座候得共、居

家は勿論、土藏物置に至迄、小破無之分は、更に無御座候、損

毛高之儀は、收納之上可申上候、此段御届申上候、以上、

七月九日

煤鼻川湛水、決潰御届、

(衍力)

私領分信州水内郡煤鼻川上、日影村内之内字岩下組地内、

地震にて追々拔崩、右川筋、三町程押埋、川幅四町程、川上

江貳拾町程之間、水嵩十八丈程、湛水に相成居候段、先達而

御届申上置候處、去十四日々雨天打續、十九日、頻之大雨洪

水に而、二十日夕、右堰留候場所、幅拾五間餘、深さ四丈程

押破、大水一時に押出、川下數ヶ村、田畑押流し、或は石砂

泥入、其外山崩、川缺等の損地、夥敷出來、殊に同郡久保寺

村、并中御所村之内、國役御普請所、年限普請所、川除土堤

石積等、數多押流、同村岡田組江懸け、切川に相成、耕地へ

川筋相立、北國往還江押出、通路差支候儀に付、民家石砂泥

水入、數多有之、尤右押破候場所、追々缺崩候様子に而、水

勢未難見極旨訴出候、委細之儀は、追而可申上候得共、先

づ此段御届申上候、以上、

七月廿九日

眞田信濃守

御支配三ヶ所御届、

私支配所、信濃國水内郡善光寺、荒安村、并更級郡八幡村、

當三月廿四日夜亥刻過、大地震に而、寺領、社領、堂、社、居

家、在、町共、大破、其上出火に而燒失、并死失等之覺、

御朱印地

善光寺領

一如來堂、内陣造作大破、

一山門并經藏、小破、

一如來供所并供水、潰、

一境内宮壹ヶ所、社壹ヶ所、潰、

一仁王門并境内社貳ヶ所、燒失、

一本願上人住居向、其外不殘燒失、

一大勸進萬善寺、護摩堂、聖天堂、内佛殿、客殿、座敷、居間

向、大破、

震災豫防調査報告第四十六號

乙

一同臺所向、并土藏六ヶ所、物見裏門、潰、

一同土藏壹ヶ所焼失、

一寺中四十六坊焼失、

一本願上人、并大勸進家來居家拾軒、潰、

内八軒焼失、

一寺領之内、寺貳ヶ寺、焼失、

一同壹ヶ寺、座敷、勝手向、潰、

一同庵三ヶ所焼、

一同社貳ヶ所潰、

内壹ヶ所焼失、

一同毘沙門堂并供所、潰、

但境内末社貳ヶ所潰、同水茶屋二軒潰、内一軒焼失、

一居家三拾五軒潰、

一町家貳千三百五拾軒潰、

内貳千百九拾四軒焼失、

一寺中并本願上人、大勸進家來之内、百三拾八人死失、

内僧十五人、男五十四人、女六十九人、

一町家死失人千三百拾九人、

内男六百廿四人、女六百九十五人、

一旅人死失、凡千貳拾九人、

但寺中并宿坊止宿、右之外旅籠屋、家内不殘死失之者も有之、止宿旅人、生死不相分候、

一怪我人多分有之候得共、家業指支候程之者は無御座候、

一穢多 小屋三十五軒焼失、

一非人

一牛馬、別儀無御座候、

以上、

御朱印地

荒安村

飯繩神領

一社務仁科甚十郎、門口、玄關、潰、

一同居家半潰、

一土藏壹棟半潰、

一民家四軒潰、

一同三軒半潰、

一同物置壹棟潰、

一山崩六ヶ所、

一田畑、道路、地割、床違に相成候場所、數十ヶ所、

一百姓壓死三人、

内男壹人、女貳人、

一同怪我三人、

內男貳人、女壹人、

以上、

御朱印地

八幡村

八幡神領

一如法堂潰、

一別當神宮寺、堂半潰、

一同庫裡半潰、

一神主松田左膳、居家半潰、

一同門口、長屋、物置、潰、

一社僧庫裡、壹棟潰、

一本堂貳棟、庫裡三棟、半潰、

一社家居家三軒半潰、

一土藏、物置五軒潰、

一民家四拾軒潰、

一同拾八軒半潰、

一同土藏、物置四十六棟潰、

一同五棟半潰、

一同壓死十七人、

內男九人、女八人、

一同怪我十八人、

內男十一人、女七人、

以上、

右之通御座候、此段御届申上候、以上、

五月十日

眞田信濃守

御城内破損所、

一大御門屋根、并東之方鱗、并壁損、西之方塀八間、東之方塀、所々損、

一御同所番所、屋根并壁、其外大損、

一御同所番所、屋根并壁、其外大損、

一御同所鳥井御門、北之方塀十二間倒、

一御同所續南御櫓、潰、

一丸御馬出脇、東之方塀五間半倒、

一御同所御井樓、損、

一南御門、屋根南平其外損、

一御同所前鳥井御門、西之方塀八間倒、

一南御門續、西之方塀十間半倒、

一御同所御井樓損、并西之方塀九間倒、

一埋御門、上東之方塀十四間半倒、

一御同所御井樓、東之外塀三間半倒、
 一御燔硝藏、屋根損、
 一西不明御門、左右石垣崩、
 一御同所、北之方塀、廿四間倒、
 一御本丸御櫓際御門、屋根損、
 一御同所、左右塀十二間倒、
 一御同所御門、壁并其外損、
 一御同所番所、屋根并南塀二間倒、
 一御同所御門、東之方内通石垣九尺、貳間半崩、
 一辰巳御櫓、屋根并壁損、
 一御同所東不明御門際、南之方塀貳尺倒、同所石垣、左右崩、
 一御同所御門、北之方塀八間倒、同續十三間倒、
 一御同所北不明、西之方塀十二間倒、
 一南御門、東之方御井樓際塀四間倒、
 一御同所御井樓、壁損、
 一石塲御門、南御井樓際六間倒、
 一御同所、北之方塀三間倒、
 一御同所番所、屋根并雪隠共損、
 一御同所、左右石垣崩、
 一二之御丸御土藏、五番、九番、十三番、右三棟、屋根、壁其外

損、
 一御武具方東之方御土藏、屋根、壁損、
 一御同所御役所、屋根、壁其外損、
 一御同所御武器御土藏、右庇一ヶ所、其外屋根損、
 一御同所西之方塀斜、
 一中御門前腰懸斜、
 一御同所御番所、屋根損、
 一表御納戸御土藏、屋根、壁損、
 一表御納關前腰懸大斜、中程中打、其外屋根、壁損、
 一御同所、霧除其外大損、
 一御同所前塀重御門續、塀貳間餘倒、
 一長局御門倒、土戸御番所、屋根、壁損、并水懸口損、
 一御表御庭御門、左右塀十二間倒、
 一樓之御馬塲西社倉御土藏潰、
 一上水手御番所、屋根并壁損、
 一御奥、西之方塀所々損、
 一御奥、西之方塀所々損、
 一室形御茶屋續、屋根損、
 一御鎮守御宮所々、并鳥居、御夜燈損、
 百間堀南々中の水の手下まで、泥を搖上たる事二三尺、

一中之水手御番所潰、

一御同所脇、御買物方物置、北側壁大損、

一御同所御門、左右石垣崩、板塀損、

一御同所、北之方土手廿二間程崩、

一知身貴亭御茶屋損、

一御同所、西御土手三十間程崩、

地割れめ、五寸より八九寸、

一下水手三十間御土藏、東之方唐松植込み内地割、

一吾妻御番所邊々、中の水手邊迄、地割、

一下水手御土藏、屋根、壁共大損、

一御同所番所、北之方壁、其外大損、

一御同所御門外、往來土堤大割、

一御作事、南塀十五間倒、

一引橋御門、西續塀八間半、同所續南塀壹間倒、

引橋御門外の御堀、泥高く押上、干潟となる、是は神田川向の麥畑三尺程下る、然れば此土、百間堀邊へ押出たるか、

〆六拾三筆、三月廿四日夜、

一御本丸未申御櫓、東之方壁損、

一西不明、南之方塀十一間倒、

一御作事御門内、塀五間倒、

〆三筆、

(五カ) 三月廿三日朝、

一大書院、屋根南半分潰、御入側天井落、

見分不行届、其後再調有之、此調不用、

御家中屋敷、見分申上、

殿町、

玄關外長屋土藏一、北之方外圍塀潰、土

藏大破、

居宅大損、長屋損、内外圍塀潰、

居宅半潰、

門口損、玄關大破、居宅大損、土藏壹潰、

二ツ大破、内圍潰、外圍塀倒、

外圍塀潰、

内圍塀潰、

内圍塀潰、

北之方外圍、物置潰、

鎮守宮潰、馬見所潰、

西之方外圍塀、裏門潰、玄關左右内圍塀

倒、

玄關屋根潰、外長屋潰、居宅大破、

赤澤助之進

岩崎勝介

鹽野熊之助

矢澤猪之助殿

出浦右近

矢野求馬

村田覺兵衛

竹村金吾

竹村熊三郎

鎌原石見殿

小幡權之助

震災豫防調査報告第四十六號

乙

門口半潰、内外塀倒、土藏一ツ大破、
内圍塀倒、

青木五郎兵衛
矢澤修理

土藏一ツ、物置潰、裏門倒、内圍塀倒、玄關
大損、土藏一ツ大損、

大熊大太郎

玄關左右塀倒、

片岡利兵衛

外圍塀潰、長屋大損、

小山田 壹岐殿

居宅大破、

彌津 彌平

土藏二ツ大損、内外塀倒、

池田大内藏

門口半潰、長屋倒懸り、土藏二ツ潰、同

恩田頼母殿

四ツ大破、塀倒、居宅損、

長屋半潰、内外塀倒、土藏一ツ大破、

玉川左門

土藏一ツ損、居宅大損、内外塀倒、

十河半藏

稽古所外圍塀倒、

前島兵庫

玄關半潰、物置潰、玄關屋根落、内外塀

楠口一角

倒、居宅大損、

内外塀倒、

磯田音門

内圍塀少々損、

草間一路

門口東之方破、内圍塀倒、

眞田勘解由

内外塀少々倒、

寺田友右衛門

門口損、門内東之方塀倒、

原 彦右衛門

土藏一ツ潰、塀少々倒、

眞田志摩殿

土藏大損、内外塀倒、

鎌原伸佐殿

外圍塀倒、土藏二ツ大損、

恩田 織部

土藏一ツ潰、同一ツ大損、居宅大損、少々

藤田典膳

潰所も御座候、内圍塀倒、

土藏大損、居宅下屋潰、内外塀倒、

福田兵衛

同心部屋、湯殿潰、居宅損、土藏七ヶ所

望月主水殿

大損、塀倒、

居宅大破、土藏損、外塀倒、

宮川長太夫

土藏四ヶ所、門口大損、居宅損、塀内外倒、

恩田新六

玄關并長屋、内外塀共倒、土藏二ヶ所大

海野藏主

破、居宅場所に寄大破、

土藏一ヶ所倒、(潰カ)外圍塀倒、

岩崎五郎大輔

木町、

裡門、圍塀倒、土藏一ヶ所大破、二ヶ所

河原舍人殿

大損、内圍塀、物置潰、

清須町、

玄關、門口潰、

金井美濃輔

外圍塀少々倒、

赤鹽喜平太

長屋潰、

蟻川賢之輔

居宅大損、下屋潰、	藤田 右 仲	土藏大破、	富岡 安左衛門
居宅大損、	坂 口 登	外圍塀少々倒、	小 泉 友 治
長屋損、	小 泉 彌 兵 衛	土藏半潰、	丸 山 馬 之 助
竹山町、		外圍塀倒、	八 田 競
外圍塀少々倒、	友 野 俊 藏	片端町、	
代官町、		長屋一軒潰、居宅損、	山 越 嘉 膳
土藏少々損、	西 村 奎 右 衛 門	門口倒、居宅少々損、	森 木 一 二 三
門口倒、屋根損、	渡 邊 十 太 夫	右同斷、	中 島 渡 浪
土藏少々損、	關 根 嘉 膳	土藏少々損、	大 谷 澤 榮 治
内圍塀倒、	小 幡 清 記	土藏一ヶ所潰、二ヶ所損、白洲并物置潰、	岡 島 庄 藏
土藏少々損、	山 越 右 馬 允	土藏少々損、	館 健 吾
外圍塀潰、	關 口 文 十 郎	柴町、	
内圍塀倒、	青 木 權 右 衛 門	土藏三ヶ所大損、居宅場所に寄大破、	金 兒 丈 助
右同斷、	横 田 甚 五 右 衛 門	長屋半潰、居宅大損、	澤 勇 五 郎
外圍塀倒、居宅場所等より大破、	兒 玉 茂 兵 衛	土藏三ッ大損、門口、長屋損、	白 井 初 平
玄關屋根潰、	大 日 向 方 兵 衛	内圍塀倒、	片 岡 唱
裏同心町、		臺所入口潰、	長 井 主 計
外圍塀倒、	宇 敷 元 之 丞	土藏少々損、	永 井 忠 藏
馬場町、		右同斷、	北 澤 叔 藏
門口腰懸、屋根損、	島 田 長 庵	右同斷、	師 岡 敬 治 郎

震災豫防調査會報告第四十六號

乙

裏柴町、

土藏少々損、

御安口、

居宅損、

玄關潰、居宅、土藏大損、外圍塀少々倒、

居宅損、場所に寄大破も御座候、

袋町、

内圍少々倒、

上田町、

居宅半潰、外圍少々倒、

居宅損、土藏一ヶ所大破、

長屋半潰、

居宅少々損、

外圍倒、

居宅大損、土藏損、

中田町、

裏之方外圍倒、

居宅場所に寄大破、土藏二ヶ所大破、塀

倒、

外圍塀倒、

山崎 友吉

春原 磯喜

立田 樂水

中村 周徹

原 權右衛門

矢野 唯美

高田 幾太

河野 彌一兵衛

高山 内藏進

上原 徳之助

菅沼 源之進

齋藤 善藏

小川 環

小野 肇

居宅場所に寄大破、土藏大損、内圍塀倒、

居宅、土藏損、

居宅大破、外圍少々倒、
(塀脱カ)

居宅損、

居宅損、土藏大破、潰懸り、

居宅損、門口、長屋潰、

居宅、土藏損、内圍塀倒、

居宅西之方半潰、外圍塀倒、

居宅場所に寄大破、外圍塀倒、

居宅場所に寄大破、外圍塀倒、

居宅、土藏大損、

居宅損、

居宅潰、土藏大損、内圍塀倒、

居宅、外圍塀少々損、

居宅大損、長屋潰、

居宅大破、臺所潰、

居宅、土藏半潰、門口潰、外圍塀倒、

居宅半分、土藏一ヶ所潰、土藏一ヶ所

大損、外圍塀倒、内圍塀倒、

居宅、門口、塀潰、土藏損、

河原 理助

春原 玄三

澤 喜代太郎

師田 寅之進

高橋 傳治

岡部 治郎右衛門

坂下 喜代馬

寺田 多宮

小川 邦人

三輪 徳左衛門

奥村 良左衛門

佐藤 小左衛門

坂野 安左衛門

中村 左兵衛

樋口 興兵衛

間庭 一郎左衛門

大島 隼見

矢島 源左衛門

佐藤 三治

居宅損、物置潰、	浦野勇右衛門
居宅潰、	北島 要 專
居宅西之方潰、東之方倒懸り、土藏大破、	南澤甚之助
長屋貳棟、内外塀倒、	
居宅半分西之方潰、長屋一棟潰、土藏	倉澤四郎右衛門
損、内外塀倒、	
居宅西之方半分潰、土藏損、物置潰、塀倒、	宮下藤右衛門
居宅大破、土藏一ヶ所潰、	藤井 喜 細
居宅北之方半分潰、南之方大破、	保科 此 面
門口潰、	佐藤 兵 助
外圍塀倒、土藏損、	深尾 立 朴
内圍塀少々損、	宮本藤兵衛
居宅損、	倉田 傳 藏
土藏潰、居宅大破、長屋半潰、	手代 玉井 熊 太
長屋倒懸り、	森山 藤 助
長屋潰、	石川 新 八
居宅潰、	石川 嘉太夫
居宅半潰、	久保新右衛門
居宅潰、長屋二棟潰、土藏半潰、	
門口潰、外圍潰、	宮入三之助

土藏大損、	山本 權 平
居宅潰、長屋半潰、	東條 龜 治
居宅大損、長屋、物置共潰、	三輪正之助
居宅潰、	佐藤 宗 二
土藏潰、	高田 力 馬
門口潰、	田中 増 治
居宅潰、	松山 養 元
下田町同心町、	
門口潰、土藏大損、	増澤 慶 治
物置潰、	相澤 惠左衛門
門口潰、	駒澤 兵 衛
右之通御座候、此段申上候、以上、	
三月	助 堤 右兵衛
	山本 權 平
○地震に付、町奉行申立、	
三月廿四日地震、潰家軒數申上、	伊勢町、
一居家潰二十軒、	一同斷半潰廿四軒、
一土藏潰五軒、	一同斷半潰十八軒、
一物置潰十四軒、	一同斷半潰六軒、

震災豫防調查會報告第四十六號

乙

中町、

一 居家潰四十九軒、
一 同斷半潰廿六軒、

一 土藏潰十一軒、
一 同斷半潰廿軒、

一 物置潰十一軒、
一 同斷半潰十七軒、

荒神町、

一 居家潰五軒、
一 同斷半潰四軒、

一 酒造藏潰壹軒、
一 土藏半潰壹軒、

一 物置潰三軒、

肴町、

一 居家潰廿七軒、
一 同斷半潰八軒、

一 土藏潰七軒、
一 同斷半潰壹軒、

一 物置潰四軒、

鍛冶町、

一 居家潰十二軒、
一 同斷半潰十九軒、

一 土藏潰十三軒、
一 同斷半潰六軒、

一 物置潰五軒、
一 同斷半潰三軒、

紺屋町、

一 居家半潰九軒、
一 土藏潰壹軒、

一 同斷半潰壹軒、
一 物置半潰二軒、

紙屋町、

一 居家潰壹軒、
一 土藏潰壹軒、

町外

下田町同心町、

一 居家潰九軒、
一 同斷半潰六軒、

一 土藏潰壹軒、
一 物置潰壹軒、

梅應院寺中、

一 居家潰三軒、
一 同斷半潰壹軒、

西念寺々中、

一 居家潰四軒、

上田町熊太屋敷、

一 居家潰壹軒、
一 同斷半潰壹軒、

一 物置潰壹軒、

練光寺々中、

一 居家半潰二軒、

長國寺々中、

一 物置潰壹軒、但園門口共、

裏同心町團七屋敷、

一 物置潰壹軒、

東十人町作右衛門屋敷、

一 物置潰壹軒、

新馬喰町、

一酒造藏潰壹軒、

居家潰×百三十二軒、

土藏潰×三十八軒、

物置潰×四十壹軒、

酒造藏半潰×貳軒、

町外潰候軒數、

一同半潰×百壹軒、

一同半潰×四十七軒、

一同半潰×貳十九軒、

西條村之内

一門口潰、

新御安口、向陽寺、

一居宅潰、

寺町、佐々木玄文、

一門口潰、

馬場町々末、駒村兵衛、

一居家半潰、

同所、淺吉、

一土藏半潰、

同所、又五郎、

一居家半潰、

寺町三光院地中、敬作、

一長屋半潰四軒、

同所總兵衛拘屋敷、

地震に付、村々出火焼失、

拾軒、

上條村、

九十八軒、

新町村、

貳軒、

久木村、

貳拾軒、

外鹿谷村、

三軒、

下越村、

七軒、

花尾村、

貳軒、

南牧村、

四軒、

吐唄村、

二十七軒、

後町、

三軒、

妻科村、

四軒、

安庭村、

貳軒、

入山村、

七軒、

鬼無里村、

貳軒、

日影村、

十五軒、

廣瀬村、

貳軒、

小鍋村、

壹軒、

橋詰村、

四十六軒、

中條村、

三輪村、

○三月廿四日夜四時過方大地震に付、御用部屋、并諸役所、櫻之御馬場小屋割、左之通、

一

(席力)
御用序、

御城代、

二

震災豫防調查會報告第四十六號

乙

御右筆組頭

御右筆、

御出役、

御座敷見廻役、

小僧役、

三

公事方郡奉行、折々罷出、
御收納方郡奉行、折々罷出、

町奉行、

御勘定吟味役、折々罷出、

御勝手評議役、

御郡中御横目、

御吟味役、

御普請奉行、

御目付、

四

御代官、

手代、

五

御勘定所元々役、

公事方御勘定役、

評定所物書、

郡方物書、

御勘定所物書、

公事方手付、

六

御賄焚出し所、

御買物、

御臺所目付、

御吟味方物書、

御臺所元々役、

御湯殿番、

御臺所帳付家具番、兼、

御買物小使、

御臺所仲間、

御臺所人足、

七

御目付方調役、

下目付、

三之裡、

詰御役人使番、并附人共、

郡方仲間、

公事方小使人足、

御玄關前小屋、

御番頭、

御番士、

表御用人役、

御取頭、

御使役、

御城詰、

御玄關前柵外御堀端、

番御金奉行、

御納戸役、

右三御役支配向、

御本丸小屋、

御馬奉行、

御馬乗、

御馬送、
(廻カ)

御厩小頭、

御口之者、

大御門脇小屋、

御城同心頭、

吾妻、

御門番、

廣場射小屋、但四月五日より、

道橋奉行、

同支配向、

以上、

三月廿四日大地震後、見分手書上、并村方訴出、

山中筋破損村數、

茂菅通二十五ヶ村、

有旅通、新町通、 \times 二十五ヶ村、

吉窪通二十六ヶ村、

田野口通二十八ヶ村、

\times 百四ヶ村、

○三月廿九日、新町訴、

山中新町村、當廿四日夜地震にて、一村舉て家潰、壓死貳百人餘に及び、其上出火焼失、剝犀川湛水二三丈之水底に相成、燒殘之家作、諸道具、相失候處、追々水面に相浮候品有之候、難澁之人別共、筏に乗候而、我増に致分取奪合候次第、中村役人共にて制し兼候に付、同心共出役之儀、願出候、

○念佛寺村、

新町善光寺々戸隱山往來道五十町程、西山中々善光寺往來道二十町程、拔覆、其外村通用道、用堰等迄、震潰、一向通用無御座、難澁至極之旨訴、

○四月二日、大原村役人申立、

村方を一昨晦日九時頃出立、所々廻り、道麻績へ出、夫々罷出候段、犀川水湛、一昨晦日願迄に、^(朝カ)松本御領船場村分之川筋迄は、少々流れ氣御座候得共、夫々下は水一向動き不相見候趣、大原村も低き所之家へは水入、高き所の家へは水入不申候、一日に水五尺程づゝ湛上り候旨、山平林村山拔込み場々、右船場村迄凡五里程之間、水湛居候旨、

○四月六日、新山村訴、

字越道山、長五十間程われ目有之、うば塚山、長七十間程われ目有之、不老山、長三百間程山崩に罷成、其上續四五十間程も口あき、難場故、見定出來兼候へども、一昨三日晚々四日朝迄、右數ヶ所下續澤に、日影澤、寺澤、西山澤、寄合澤、先月中々旱魃之處、當四月二日頃より、右澤々出水仕候儀は、大地震故哉奉察候、此上如何成可申哉難叶、^(計)大小御百姓、當惑仕候、

○犀川水湛場之儀は、昨五日申上候處、右場所より凡十町餘下にて、安庭村之内藤倉と申處々山拔出、長井村之内江見組前へ突出、川筋押埋申候、元川數々眞高凡十七八間可有由奉存候、大小石共押出候へども、土砂交居候に付、岩倉押出

震災豫防調査報告第四十六號

乙

よりは、少輕き方と奉存候、繪圖面朱點之所取方付、瀬筋相立候はゞ、此處にて水湛候日合は、有御座間敷哉に奉存候一土尻川水湛之場見分仕候處、五十里村大現堂と申山拔出し、水湛に罷成候、元川敷より眞高凡十二三間、長七八十間程に御座候、岩倉へ懸合せ候ては、格別にも無御座候、其上近村人足罷出、水行仕、あき場所堀割罷在候、然處近村迎も、銘々家被押潰候間、打續人足罷出之儀、出來申間敷様子、何卒寄足人に而、最少々掘割候はゞ、水上村々、田畑は不及申、居家迄も助り可申奉存候、此段荒々認取申上候、以上、

四月六日

見分手御勘定役

御預所高井郡十二家村、怪我、死失等、一切無御座候、
(箇カ)

一水内郡中尾村、潰家、半潰等之家數多にて、男女死失八人有之旨、

一同郡津野村、潰、半潰共四軒有之、其外物置、土藏等、少々宛之損失御座候得共、怪我人等、總而無御座旨、

一同郡栗田村、潰家も無御座、少々宛之損失、一統之儀に有之、怪我人等無御座候得共、人別之内上下五人、善光寺町に止宿罷在、死去候旨、

一同郡權堂村、善光寺町續に而、一村家數潰、燒失仕、殘家數十軒餘に相成、死失九十人程、怪我人凡百人餘有之旨、一體右村之儀は、村方に而地震之上、大火之儀に付、家財は勿論、夫食等取立候儀、出來不申、大小之無差別、夫食等指支、難澁之旨訴出、御救之筋之儀相願候に付、隣村栗田村江申渡、夫食融通爲仕、其上、右權堂村々非常爲御手充、御役所へ指出金仕置候に付、云々、

四月六日

御預所

○四月七日、新山村訴、

先達而御訴申上置候、字不老山拔崩候上、續崩候場所、尙又昨六日朝、地震故也四(カ)五尺許宛、凡三四間程之われ口付候に付、此段別紙以繪圖面御訴申上候、右場所拔出候ては、當村住居は不及申、御田地多分荒地に罷成候やも難計、大小御百姓、一同當惑仕候、乍恐此段御訴申上候、

○四月五日、水湛之場所見分之次第、

犀川筋水湛之場所、見分被仰渡、昨四日早朝出立罷越候處、途中通路極難場にて、漸九時頃場所着仕、見分仕候次第、左に申上候、

一昨日暮時々今朝六半時頃迄に、水高二尺三寸程相増申候、
(嵩)

晝夜に而は五尺五六寸づゝ相増申候趣、先達而出役仕居候同役々申聞候、

一今朝迄之水陸に而、是々水行可仕低場所に而、壹丈貳尺程も御座候、夫々下之方窪き場所も御座候へども、百間餘相下り、水陸々四丈程高き岩山御座候間、此上七日程も相立候はゞ、水流可仕候得共、水流之場所之如くに御座候得ば、川幅狭く、犀川常水丈は水流申間敷奉存候間、追々水嵩相増可申候、乍去岩間水潜り可申哉、左候へば水流日合相違可仕、如何にも見極出來兼、治定之儀、難申上奉存候、
一水内村平組々向三水村平迄、水面凡七百間程に御座候、
一水面々三水村長勝寺森迄、高凡五十間に御座候、
一水下にて常之川敷湛場高き所、眞高凡二十五六間程に御座候、

右之通、今朝迄見分之次第、如此御座候、此地今以地震相止不申、拔懸り候處、諸所拔崩候而、此上如何變化可仕哉、併右體極難場御座候間、見盤建所開場等も心底に不任候間、治定難仕候得ども、凡之處認取申上候、以上、

四月五日

見分手御勘定役、
馬場忠吾
片桐重之助

○四月十三日夕七時、犀川湛場決出、

○四月十三日、洪水之中に而、福島新田村壹軒焼失、御預所村山村にて、五軒焼失、

○犀川水湛に付、水入之村々、

川南水入村方、

三水村、

須卷村、當時之所、

竹房村、

下市場村、

牧野島村、

牧田中村、

中牧村、

山和田村、

吐唄村、

川口村、

安賀村、

町田村、

下大岡村、

追崎村、

長瀬村、

代村、

平村、

越中川村、

川北水入村方、

水内平組、

橋場村、

上條村、

新町村、

黒穂刈村、

大原村、

日名村、

千原村、

橋木村、

○上山田村訴、三月、

當村字法華寺、田畑之内五十間四面之場所、水冠に相成、出水日に相増候様子に而、只今之分に御座候はゞ、拔落可仕奉存候に付、左右へ小堰相立、急難除仕度奉存候、乍恐此段御聞置可被成下候、

○出水之翌日、見分書取、

鳥打坂下の路上畑中共、古材木、雜具多流留、路上水深、馬足立兼候に付、步行立に相成罷越候、此邊善福寺本堂庭迄、水指申候、大室村立家、鴨居を五寸程下迄水附申候、崩家、材木、其外雜物多有之、殊に同村中に多く、漸々步行仕候、同村東山際小池等池邊、崩家多留候由、關崎手前、道上、水膝節上迄届申候、關崎に而見候へば、犀川、下真島、中真島の間へ押出し、下真島川合裏を、一圓之河原と相成、水は流不申候、川田村手前小金場所と申所、土堤二三百間押切、真直に川田村へ押入、夫々東川田を牛島村へ押懸け、本川筋へ押落申候、川田村立家、土臺を五尺程水付申候、潰家一軒、藏一棟潰申候、川田裏土堤、川付の方は、跡形も不相見、内土堤は所々押崩申候、東川田村、水付同斷、立家一軒、物置五棟、押潰申候、豆島舟、東川田を餘程南の方へ押上げ置申候、此邊を土堤大半切崩、家、大木等、尤多流留候、牛島蓮證寺半潰、半鐘押流候由、此邊、崩家、雜物、衣類様之物、取分多く留り居申候、牛島村、居家八軒押流申候、其流跡礎石少々残り候而已に御座候、上牛島は五軒程、物置等は不知數、村中、泥、三里迄届申候、水跡は鴨居上に有之候、綿内入口土堤二筋共、數ヶ所押切、所も上を越て村内へ突懸候故、潰家も多分相見、水跡は

鴨居上に有之候、壁土は不殘洗落申候、殊に村内へ流家の屋根多く押重り、立家と並候程にて、通行甚難澁に御座候、右屋根、其儘にて留り候は、牛島裏を綿内裏邊、幾百可有之や數を不知、其外一抱に餘り候大木之立木、材木、立臼、摺臼、家財等、小山の如くに御座候、綿内を下は、稀に御座候、綿内へ入候水は、北東へ出、井上、幸高村へは不入、右兩村の裏道を下、小くらと申村半分程に而、松川に而留り、須坂町へは一切入不申、下は福島、下中島の方へ押行候様相見申候、麥作は大室迄は伏候も、稀に相見候處、川田を不殘伏申候、殊に綿内邊は、穗先泥中に入候位に相見、所々流失候場所も多く相見候、凡而須坂御領は、當御領を破損等、一等甚敷と奉存候、綿内を下は、水勢餘程緩之様子に御座候に付、吉地邊を罷歸候節は、千曲川常水より少々多き位に相見、路上之水は一切無御座候、右見聞仕候趣、大略申上候、以上、

四月十四日

高野車之助

○見分手書上、

一福島新田村、一布野村、一中俣村、
右三ヶ村、家流、死人も兩三人づゝ有之、右に准じ、田畑等、格別相荒申候、

一里村山村、一松岡新田村兩組、一大豆島村、

一下風間村、 一小島村、

右は家流、田畑、格別相荒申候、

一小市村、

右は地震潰多有之候處、住居缺落、往來道迄、格別難澁仕候、

一千田村兩組、 一風間村、

一長池村、

一市村兩組、 一久友村、

右は田畑水押候へども、住居差障無御座候、

一下千田村、

右之村、御料所と交り居候故や、御料者に交り、他村他所まで罷越、流水引揚候由に付、村役之者共、右體之儀無之様、申渡置候、

一市村北組、

右も同様之始末に而、善光寺へ賣拂候由、風説仕候、

一里村山村、

右は夜番等も等閑故や、小盜等も間々有之、其上難澁之もの、穀物壹二俵位、所持仕候を流し候て、同村之者拾ひ揚、隠し置候風説仕候、

一福島新田村、

右は村、前々四ヶ村寄合土手有之、^(堤)右土手、所々拔損じ候

に付、此上少々^(家カ)の出水も、同居住居難澁仕候、

一相野島村、 一福島村、

右兩村、家潰、死人等有之、其上七八尺も水付、甚難澁仕候

様子に御座候、

御預所
一小沼村、

御預所
一マ、

一牛島村、

右三ヶ村、五六軒宛家流、殊之外難澁仕候、

一牧島村、

一大室村、

一町川田村、

一東川田村、

右四ヶ村、居家水付、難澁仕候、

一小河原村、

一幸高村、

一小布施村、

一大熊村、

一柴村、

右は住居水付無御座、田畑迄水付御座候由、

一中澤村、

一東福寺村、

一下布施村、

一上布施村、

一藤牧村、

香水無之、他村々貫水仕、相凌罷在候、

一四ッ屋村、

住居出來兼、最寄之方に罷在候、

一小松原村、

住居出來兼、山際に罷在候、

一原村、

震災豫防調査報告第四十六號

乙

香水無之、他村々貫水仕、相凌罷在候、

一布施高田村、一布施五明村、一御平川村、

一横田村、一會村、一小森村、

右村々、用水無之、難澁仕候間、早速用水之方、御手充被成下候様申聞候、其外相替儀無御座、村々穩に御座候

四月

見分手御徒目付

○立が鼻渡船場、少し上の方へ流落候、篠井川と申、川幅凡八九間程の川有之、右川筋之内草間村と申、椎谷様御領分之村に而、山拔、右篠井川を湛留候て、小沼村杯へも窪地へは少々水入候由、尤三月廿五六日頃は水落候、

○地震にて、澁湯少々減じ、角間は湯少しふとり候、

○五月廿八日、鹿谷村水湛見分手書面、宮澤勇之進、

鹿谷村水湛之場所見分仕候處、此上七八尺も溜り不申候而は、堀割、川筋へ乗申間敷と相見候、常水にて一晝夜に此節三四寸ならでは溜り不申候由、此水壹升餘之水と相見申候、長横之儀は、凡繪圖面之通、深さは不同に可有之候得共、拾五丈位は可有之、抜口之儀、一時は抜申間敷と多分見込居候へ共、堀割北之方高三四間も有之、大石は稀にて土多く候得ば、流れ相付候ば、四五間餘は、一時に缺込有之間敷共難計

儀に御座候、堀割末之方、大石數多有之候得ども、末之方は谷深く候故、流れ相付候はゞ、一時に拔落ち可申儀に御座候、

○瀬戸川村成就組、

右組之儀、損地高は多く有之由に候得共、人家潰等は弱目にて御座候、御手當等には、此節麥作へ取付候儀に付、先何にても差支相見不申候由、社倉圍穀之儀は、御書上高三百貳三十俵仕置候由に候得共、稗百七十俵、郷藏へ積入候外無之由、然る處此度郷藏潰、二十俵程は用立、其餘は埋り土交り等にて、損失に相成候由、右之外金子にて八九兩有之、人別口預り杯と御書上は仕置候由に候得共、内實は壹錢も無之由に御座候、

一田方十七石程之場所、用水出不申候に付、畑物仕付仕候由、且人家用水も、組之場所に寄り、井戸水出不申、隔候處より持運び、難澁之者も有之由、

一同組長八と申者、今年七十七歳程に相成候由、此もの、先年妻子も有之候處、死去いたし、其上元來勝手向難澁にて、先年は少々之御高目所持致し居候由に候得共、當節は不殘讓渡し、居屋敷も借金之形に、同組金右衛門、勘七と申者へ引渡し、住居は矢張其儘借家仕居候由、日雇稼等に

て相凌居候處、此度之大變災にて、村内一統、夫食拂底相成候へば、自然と雇候者も無之、且次第に老衰に相成候へば、壹人前之仕事も出來不申候故、彌相雇候者も無之、喰方差支、難澁相成候由、尤右借屋、聊の小屋には有之候へども、半之丞と申者、居家潰候に付、長八宅に假住居致し居候由、此半之丞儀、此度之變災に母と娘と壓死仕候由、右菩提にも可相成迎、同居之事故、長八を能いたはり、朝夕食事等心懸候由、乍然追々半之丞儀、小屋懸しつらひ、夫へ引越可申合之由、左候へば長八喰兼可申由、此節親類等無之、村内にて漸く從弟、又從弟位之者有之候得ども、何れも難澁夫にて、合力等出來候は、一切無之由に御座候、

○埋牧組、

右組之儀、人家潰、地所損地等、(就脫カ)成組位にて、先差當り喰兼候程の者無之由、將又横まくり組人家五軒、花岡組貳軒、天京組五軒、十二藏組五軒、季平組九軒、右五組、此度之變災にて用水留り、井戸干揚に相成、無據二三町、又は十町程も隔候所より、用水持運び、難澁致候由、社倉圍穀之儀は、成就組同様、御書上通は表數にて、過半不足に付、此度之變災を幸に、不殘願下げ致候由御座候、

○馬曲組、

右組之儀は、小川と申川湛留、人家六七軒、水入に相成候得共、一體之弱目に而、人家潰、又は半潰等、少々御座候、是亦御手充等にて凌居、此節は麥作に取付候儀に付、差向夫食指支人等無御座候、社倉圍穀儀、御書上高六百俵餘之内、社倉藏へ百六十餘俵餘、稗、大豆等にて積入置候分、此程中願下致し、六組へ高割軒割等にて割渡候由、組切請取候内、難澁人別へ割合に不抱、融通致し遣候由、將又郷藏へ稗、大豆にて二百俵入置候所、拔覆りに相成、土藏、穀共に、跡形なしに相成候よし、其外之俵數、又は金子拾兩有之、御書上致し置候由に候得共、内實は一切無之由、此程中、名目許之俵數も、願下致候由に御座候、

一同組重三郎儀は、元來勝手向宜者にて、此度御上へ大豆、小豆にて拾俵獻上仕候處、其儘同人へ御預に相成居候由、此もの心懸宜敷、隣家并に心安き者へ、穀物少々宛心懸遣候由、取沙汰仕候、同組頭立喜兵衛儀も、大豆、小豆にて十俵、同組善九郎儀も、大豆壹俵獻上仕候處、重三郎同様、當人共へ御預被置候由、

一同組之内桐山組之儀は、平年迎も格別入組之儀に付、難澁に有之候所、此度之變災にて、潰家又は御用地拔崩、覆り等も有之故、一入難澁仕候由、乍然御手充等にて、時之凌

震災豫防調査報告第四十六號

乙

仕候故、先差當り食兼候者も無之由、明賀組之儀も、右同様之由御座候、

一馬曲組之儀は、田方は御高十四石程ならでは無之由之所、水入、拔覆り等にて、一切稻作出來不申候に付、畑物仕付候由に御座候、

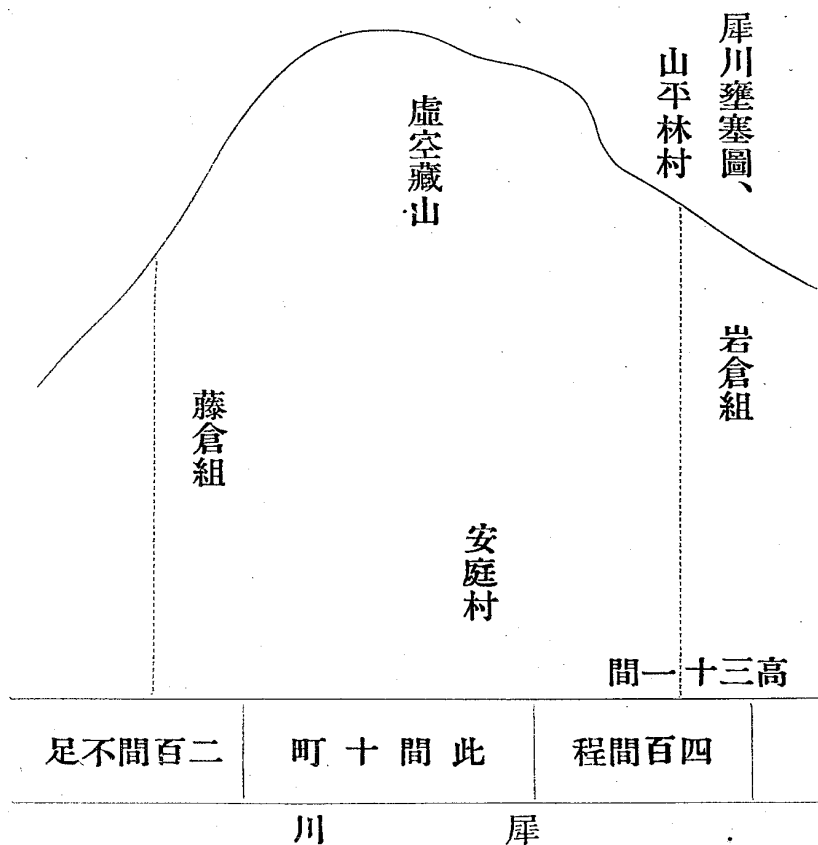
以上見分手書上、

○煤花川鬼無里村田浦と云處、山拔にて流塞り、水湛になり、九軒の家、四軒水中になり、五軒は水難をのがれたり、七月廿一日、湛水決し、激水壹丈はごなりしが、忽ち引て、水中の家も出る事を得たりとぞ、流末廣瀬村、小鍋村、茂菅村、川邊岸缺落、石砂入場所あり、荒木村、岡田村、中の御所村、新田村等、居家に水入候由、市村、妻科等も同様と云、

○入山村、七月廿日以來、續て白雨に付、覆の場所、出來候由、翌戊申五月十一日暮六時頃大雨にて、水内腰村往生寺持山、去三月大地震の節、拔崩候續、東の方凡横十間、長三十間程、拔崩、本堂押潰候旨、尤怪我人等、一切無之旨、同月十四日訴出、

山平林村に虚空藏山あり、此山二ヶ所崩れ、犀川に落入りて

流れを堰留る、上流へ崩れ落たるは、岩倉組に懸りたる故、藤倉山の崩れと唱ふ、其實は皆虚空藏山なり、藤倉の崩れ、



長さ貳百間に足らず、高さ拾六七間あり、上の堰留と、下の堰留との間十町也、

御近領地震風説、

善光寺、地震にて潰家、諸所より出火、大本願寺を初め、塔頭

四十六坊焼失、大勸進は潰れ候而已、大本願寺、大勸進家來、并に門前町家、其外八町之内、貳千百九十四軒焼失、

町方死失千貳百七十五人、内男六百七人、女六百六十八人、

寺中并宿方止宿旅人、去死凡廿九人、(死去カマ、但旅人は、宿帳焼失故、數不知と云ふ、)

本堂、山門、残り候のみ、

火は滅す者なく、もえ次第故、廿四日夜より廿六日まで、煙絶へず、

如來假堂、本堂より三町程東の方、

本堂より北東に於て、丸太にて二間半四方に假堂出來、籠堂三間に七間、大勸進并に衆徒坊舎の小舎、三間に八間、

又東南に役所二間半に五間、同會所九尺四方、三月廿八日より五月十六日迄、本尊正身厨子、并印文、大勸進守護にて開帳有之、

遠國旅人、又血縁ゆかりのなき人の爲、八間に三間の救小屋出來る、又假堂におゐて、四月十三日より百日の間、非業の亡者菩提の爲め、如來前におきて、朝施餓鬼あり、五月六日、如來、萬善堂に移し奉り、尤六間に拾壹間作り足しあり、本堂修覆あり、十月十八日、如來御歸り、

四月下旬、假堂の近邊にて、酒、さつま芋賣、少々有之、田樂店壹軒、團子店壹軒有之由、

其砌は屍の焼候臭氣甚敷、食事も出來兼候由、夜中はいづくもなく、死人の聲ある故、戸外へ出るものなし、

誰人か狂歌、

死たくば、信濃へござれ、善光寺、

うそはござらぬ、ほん多善光、

○稻荷山、潰家皆焼失、死人も多く有之、豪家田中某、貯糶貳千俵、悉く焼失せしに、其積たる中程の俵は、皆紫色に變じ、形は有しまゝ也、糶は實は失て、皮のまゝにて、色眞白に美事なり、

○飯山御届書、寫あり、

吉村といふは、一村悉く覆没す、

○松本城下に川有之、川南は震強く、川北は震少し、城主御住居、別條なし、町家潰候は無之、尤皆小屋懸いたし置候、城下より十町程隔り候所にて、岩拔落有之候へども、右にて差支の沙汰は無之、

船場と申所へ水湛上り候はゞ、山中山拔、水湛居候場所へ、水のり可申やと、風説いたし候、

地震は松代の十分一程にて、町屋、屋根、壁等少々損じ見え

震災豫防調査報告第四十六號

乙

候のみ、城下四五町隔り、往還より三四町脇、田の中、地震にてわれ、冷水出、其水中にて青き火燃候由、皆々見物に参候、池田村、潰家四五百軒、(街カ)其外二階落、或は堀込倒屋有之、押野と申處は、家九軒、地の割間へより込、其邊沼と相成、

○上田、

三四ヶ村之内、流家、溺死等有之、

町方、何れも小屋懸にて罷在候、火之廻り、嚴重に有之、

○戸隠、

村中潰家無之、上野村、潰家四五軒、怪我人三人程、裡山を流れ出候谷川、山崩にて二三日水湛へ、廿七日頃、上楠川村、三軒流家有之、三月廿四日、廿五日は、鳴音有之、其後鳴は無之、震は日々少々づゝ有之、

越後柏崎、地震格別の事無之、廿四日、廿五日、廿六日地震、廿八日強震、

○高田、潰家多有之、

○上州高崎止宿之者、廿四日夜酒給居候處、地震にて側に置候小徳利倒れ、棚に有之品落候に付、驚き、庭へ駈出候、宿中大騒ぎいたし候、

○拙者領分越後國長岡、去月十四日、信濃川急満水にて、常水より壹丈餘相増、地窪の田畑、水冠り場、左之通、

一高壹萬百三拾七石、古志郡之内、

一高四千五百四石、三島郡之内、

都合高壹萬四千六百四十一石、

一堤、樋、橋、其外破損、

城内始、家中無別條、人馬怪我無御座候、

五月九日

牧野備前守

○飯山領、

矢島村、凡五十軒許之處、七分潰、死失十九人、

東伊部村、凡四五十軒之内、二軒半潰、外皆潰、死失廿三人、

西北兩伊部村、不殘潰、死失廿壹人、

七瀬村、貳軒殘、外皆潰、死失三十五人、

吉田村并新田、凡百軒程之内、十四五軒潰、子供壹人死失、

岩船村、凡四十軒程之内、五軒潰、

若宮村、壹軒潰、

金井村、同斷、

田上村、入口出口、潰家有之、

横吹赤倉崩、大小石、道に落有之、

飯山城下、死人數多、夜中狼多く出候に付、威鐵炮夜中打放

の聲、度々聞く、

○鼠宿村恒右衛門、四月中、越後長岡へ罷越、五月六日、歸宅、左之趣申聞、

三月廿四日夜、長岡、地震大搖にて候得共、家居之痛等は無之、四月廿日迄搖、其後相止趣に候、

○四月十三日夕洪水、長岡表は去年八月之大水より少々に御座候由、新潟も同様之由、但十四日朝半時頃より水増始め、四時前大水に相成、長岡御領之内、土堤切れ、荒所も少々有之由、

○長岡、此節米相場玄米四斗八升壹匁、代金壹分貳朱と五六百文位、

○高田表、玄米五斗貳升入壹匁、代金壹分貳朱と四五百文、

○同町四月廿九日夜九時出火、八分通焼失、翌朔日四時鎮火、町家凡貳千軒有之處、端にて貳百軒残り候由、

○高田表、今以て地震有之、五月六日、松本嘉十郎

上州吾妻郡、三月廿四日夜の地震強かりしが、家の潰るゝ程の事なし、唯去年以來、ぬりたる新しき壁損じたり、四月廿

日頃までは、日々少々づゝ震ひしが、其後は稀になりたり、○草津の温泉、地震の後一統にぬるみたり、熱の湯、脚氣の湯などもぬるみて、浴するに苦なごぞ、

○吾妻郡、破損程の地震にはあらねど、暫くは假小屋に寝て、住宅をば離れ居しとぞ、

以上三條、

大笹 鎌原縫殿話

○春原六左衛門實家、高田藩伊野宮彦兵衛より來書、

一筆致啓上候、然者廿四日夜五半時之大地震にて、當表にて一家中には家潰候處も無之、然れ共なやろう下坏は、所々潰

れ申候、其外本屋はまがり無之處は無之候、拙家も餘程南の方へまがり、かべ坏は三所許り落申候、はしら石づへはづれは、所々に御座候得共、家内中怪我人無之、其外好身中にて、も、けが人無之候間、御安事被下間敷候、其後度々之ゆれにて、今以小屋懸にて相暮申候、家中一統、右之事に御座候、町家、在家は所々潰れ申候、火事は一所も無之候、御地之儀、安事申候間、一筆申遣候、早々返事待申候、信州邊は大へん之由、大に安事申候、右之旨、小屋之内にて認め申候、今以度々之小ゆり御座候間、本屋へいつ入候事とも相知不申、大へんの至に御座候、早々相待申候、

三月廿七日夕方認、

伊野宮彦兵衛

春原六左衛門様

(被脱カ)

一筆啓上候、彌御堅固に成御凌候哉、久々便不承、安事申候、次に拙家好身中、何れも無別條罷在候間、御安意可被下候、又此度之大地震、如何にも大變之儀に御座候、其表爲差事も無御座候様に承候へ共、町家は少々潰も有之由に話承り候得共、暁と承り不申、大安事申候故、先日飛脚遣し候處、丹波島川留之由にて、其者歸り申候、此度又々便承に人遣し申候、委敷返事相待申候、當地にては、廿九日晝時に又々大地震にて、所々之家潰れ申候、何分此節は小屋之内故、別而人之怪我は無御座候、其後七時に又々揺り申候、其後今日迄日之内に幾度となく數不知小地震故、假小屋々本屋へ參り候事は、相成不申候、夫故在家何れ小屋之内に罷在候事に御座候、晦日には大雨にて、假小屋何れも難儀之事に御座候、昨日は南風に而砂を吹き、春霞の如く向見へ不申候程故、大難儀に御座候、何分町家にも商賣無之、夫故商人は壹人も參り不申、致度無御座候事に候、只々子供に浦のよめ葉、三葉、せりなど摘ませ、ひたし物に致し候々外無之候、如何にも看にてもたべ候事は相成不申、段々靜にいたし、魚にてもたべ度事に御座候、先日頃は海水餘程引候に付、何れも水の出し、高田中水の中と承知いたし、山々へ參り居候人も有之候

得共、何の事も無之、其人の歸りは、おかしき事に御座候、御上にては、假小屋所々に立申候、御存も御座候哉、出丸御藏之内、西之方之御役藏二ヶ所やぶれ、御堀迄三間程も有之處、御米出候て、御堀へ三百俵餘入申候、其米引上、天氣之節、大勢にてほし居候處申候、此度之地震にて、町家、在家は素より、家中の藏もいたみ不申所は無御座候、拙家杯はかるき家か、藏と違ひ、あまりいたみも無之候へども、餘程まがり、其上下家などは、所々いたみ申候、此度靜に相成候へば、又又普請に取懸り候事に御座候、如何にも大變之儀に御座候、乍然家内之者、達者にて悦申候、先達而屋根屋にクギ遣候も參候哉、今以返事も參り不申、如何に御座候哉、地震前に普請に取懸り候や、是又安事申候、御好身中に而も、皆々様御達者に御座候哉、外様へは別段久御見舞も不申、馬場、奥村へも久々御不沙汰之至り、宜御申上譯可被下候、此度輕少なから、ひだら、かれへの子、見回として遣申候、今日よふく外々貫候へ共、拙家にてはたべ不申遣申候、拙者杯は久々看もたべ不申、干物之様に相成候へ共、戰國は如何之物哉と存居候事に御座候、輕少なから進申候、又々貴様よりも、此者歸りになにか少々御遣し頼入候、右は此節之御見込の、み、小屋之内に而書留申候、恐惶謹言、

四月七日認

伊野宮彦兵衛

春原六左衛門様

○越後今町、三月廿四日、海上鳴る事夥しく、高田城下へ聞えたり、海の鳴ること折節はある事なれども、此度例ならず夥しかりしかば、何か變事あらんかと恐れしが、果して夜中大地震あり、

御近領飯山異變之次第、

飯山城下町、

一御家中并城下町、地震潰之上出火にて、半町程町家焼残り、其餘は焼失いたし、死失人も參百人程有之、其上并地形七尺程高く相成候由、御城は裡御門立居、表御門、御櫓、御圍塀等、不殘搖潰し、御住居向も御廣間は地形貳尺程も窪く、地底へ搖込候と申儀に御座候、御領内總村數六十四ヶ村有之候得共、一村にても無難之村方無之、潰家、半潰迄貳千五百軒に及び候由、死失人も町家、村方にて千三百三十三人有之由、御家中葬五十三人有之由、右之内焼失、本多助之丞、田中源左衛門兩家を初、其外姓名不相知、御家中も少々焼失之由、一統御手充は、本潰へ金壹分づゝ、半潰壹朱之割にて被下候由、右之内吉村と申村は、山拔押

弘化四年

埋り四拾軒、地震潰三十軒、死失百四十人餘有之、押埋候ものへは、金參分宛被下、其上拜借金七十兩被成下候由、一表御高は貳萬石に候得共、御增高も有之候而之事哉、一統申唱にも參萬四五千石も有之内、字いも川堰申處、水上より流尻迄は七里餘も有之由、右堰は地震之節、所々缺崩れ、水道絶、是迄壹萬石餘も田用水に相成來り候處、拔埋り、無據當秋には、山地壹萬壹千石餘之處にて、漸々三分通り仕付に相成候由、其外川邊八ヶ村にても、田地床違ひに相成候場所、二分餘も仕付相成兼候由、尤川邊八ヶ村にて壹萬石餘有之候、

椎谷領、

椎谷御領村々、災害に就きて、

一問御所村、其外六川近邊御領内へ、本潰へ金五兩づゝ、半潰貳兩貳分宛被下候由、其外酒造渡世にて、是迄御用立候ものへは、金七兩貳分被下候由に御座候、尤地震潰は格別多有之趣には無御座候、乍去御高柄には、多分之御手充被下、夫食御救方も厚く御世話被成下候儀、一統唱悉く宜御

座候由、尤夫食之儀、善光寺焼之砌は、穀物賣買無之處、問御所村にては、百文に付壹合安く、米暫之内賣候よし、

須坂御領、

右御領災害、并御手充次第、

一綿内三千石にて、家數七百軒餘有之由、内五百軒程水入に相成、流失十五六軒有之、最初は流失水入人別へは焚出し御救被下候のみにて、金子御手充無御座候由、漸々當月初旬に相成、流失のものへ、金貳兩三分貳朱づ被下候由、水押半潰にても極難之者共へは、矢張本潰同様被下候由、手元可也にて水押半潰之者へは、貳兩宛、家居流潰無之候ても、水先へ懸り、凌に難澁いたし候者へは、金壹兩被下、一通り之水入人別へは、金貳分宛被下候由、右之内、土屋坊村小兵衛と申者、親子三人流失に付、此者へは金七兩貳分被下候由に御座候、綿内村外に水入候村方五ヶ村有之由、右五ヶ村は、一通り之水入に相成候故、金貳分づ被下候由、五ヶ村にては、二千石程も可有之様子之由、

中野御支配所、

災害村方、

一右御支配所、地震潰村々多有之、中にも北國往還牟禮、野

尻、古間、柏原等は、宿場之事故、御手充拜借、外並方々多分之由、尤驛場に付ては、往來筋差支候程之儀故、一通り潰村々へは、潰壹軒に付金壹兩之當り位の由、尤川西川東(に脱カ)村々寄、潰之上水災に逢候分へは、壹兩より少々多分の由、川東村々にては同様之村方七八ヶ村も有之由、尤年賦拜借として證文を銘々差出、右へ役人共請判致し、差上候上、金子村役人へ御渡に相成候由云々、

六月

○上田町の井の水皆竭、井に入て見るに、霧の如く氣立て、入たる人、色變じて死す、五六人も死したりと云ふ、水竭たるは近日の事なりと、六月廿八日、青木藤五郎云、

○小室藩牧野主鈴よりの書翰、

此度之大地震、廿四日夜四ツ時前より相始り、廿五日七ツ時過迄、不絶震續に御座候、乍然仕合に潰家等一切無御座、怪我は尙更無御座候、尤城中石垣等、所々損所少々宛は御座候得共、爲指事には無御座候、

○小室地震の後、用水井に井の水、皆増して出ると云ふ、

○須坂地震、水災、御役人より文通申來る、

一流失二十九軒、

一流失貳百六十六軒、

但土藏、穀倉、其外共、郷藏三ツ、

一潰家八十五軒、

但地震、水潰共、

一半潰并大損貳百五十二軒、

一壓死拾壹人、

一溺死六人、

一怪我人數不知、

一斃馬壹疋、

以上、

弘化四年丁未、

(符カ)

先達而善光寺表御救方之等之儀に付、出役被仰付罷越候砌、
奥州弘前御家中之由、佐藤順助と申者、勢州參宮之序に、善
光寺參詣、大門町藤屋平五郎方、主從四人止宿仕候處、同夜
大地震にて、家居不殘相潰候に付、驚、漸く其身許り逃出、追
道家來も一同に罷成、町川田宿問屋西澤又右衛門方へ罷越、
止宿致居候て、同人へ申聞候は、右平五郎方に差置候荷物之
内に、金百五拾兩程入置候間、燒金相成候共、詮儀致見度趣
相頼候故、又右衛門方出役先へ内々願越、順助家來も罷出候
間、始終篤と承候處、疑敷様子にも不相見候間、寺領役人へ

申談、爲掘候處、二朱金に有之候故、皆一塊に罷成居、壹分金
銀少々には候得共、燒候許りにて、其儘有之候、其外大小之
身、鐔、縁、頭、并鐵物類も御座候に付、家來江爲見候處、見覺
有之候品に御座候旨申聞候間、引渡之儀、又右衛門へ申含相
渡申候、然所此程順助方右謝禮茶一箱づゝ、江戸表方差送候
旨にて、又右衛門方相届申候間、御聞置可被下候、此段申上
候、以上、

六月

馬場忠吾

片桐重之助

成本治之助

乍恐書取を以奉申上候、

奥州弘前様御領分、青森湊町御奉行附佐藤準助殿、町會所物
書館善兵衛殿、外に小者兩人、勢州參宮之序に、善光寺へ參
詣仕度、當三月廿三日、同所大門町藤屋平五郎方に止宿之
處、廿四日夜大地震に而被押潰、小者兩人に而屋根を破り、
漸拔出、準助殿、善兵衛殿は、小者の衾を着て、小者兩人は襦
袢にて、四人共下帶をさき帶に、翌廿五日、大豆島渡船致
し、私方へ罷越、右之趣相咄、空腹之由被申聞候間、晝飯差出
候處、拙者共儀は、弘前家中之者、今般勢州御神樂に罷越可
申筈之所、右之始末にて、持參之金銀、并大小類等、荷物に入

弘化四年

(考カ)

置、焼失仕候へ共、此儘參宮難相成、依之江戸屋敷へ罷越度存候得共、右様見苦敷に罷成、其上準助儀、少々怪我仕、甚及難儀候間、一宿致度由被申聞候付、小屋場に爲宿申候、然る處當所より江戸表江之道中筋不案内に付、人壹人雇吳候様被相頼、右持參之金銀等、穿鑿可仕心得無之様子に御座候間、私申候は、御頼之趣承知仕候、且又幸ひ松代々善光寺表御救方として、御出役も有之候間、御穿鑿被成候而は如何、譬焼金成共、江戸表へ御持參被成候方可然やに被存候旨申候所、夫は難有御座候、一體詮議之手寄も無之候へば、先々助命にて罷在候間、持參金銀品之儀は、如何相成候共致方無之心得に御座候、乍去右様之御手寄に而御詮議可相成候儀に御座候ば、金子之儀は百六十兩程、荷物に入置候間、何卒御出役様方へ御願申上吳候様被相頼申候に付、上松村御出役向片桐重之助様、成本治之助様へ、以書面右之段御願申上候所、早速旅宿藤屋平五郎方座敷跡爲御掘成し被下候處、五百七十匆程、外に大小并金物類、御掘出に相成候由にて、御沙汰被成下候に付、廿八日、物書善兵衛、外に私壹人相添へ、上松村江罷出候所、右之品々御渡被成下、頂戴仕罷歸り、準助初一同悉相悅、御出役様方御仁惠之程、厚相心得、翌廿九日、私方出立仕候に付、大小一と通り、腰物壹本、綿入二ツ、帶四筋

(兩カ)

其外兩具足代品相貸し、當村芳吉と申者相雇、荷物爲脊負、江戸表迄案内爲致候所、江戸着之上、貸遣候品々、芳吉へ差戻、其節爲御禮、御出役様方へ茶箱指上吳候様、私へも茶箱二ツ被相送申候、且又芳吉へは向賄之上、金三分被相渡申候、然所先般歸國に付、私方へ之書狀、并國產之品貳包、江府御屋敷へ相廻、此度北澤彦太夫様々、松本嘉十郎様御名宛にて、御差送に罷成、右書狀并包物共、御渡し被成下置、難有頂戴仕候、依之奥州へ到來仕候書狀貳通相添、此段乍恐奉申上候、以上、○二通ノ書狀ハ略ス、

川田宿

弘化四年十一月

西澤又右衛門

信州高井郡川田宿

奥州津輕青森々

七月廿日出す

西澤又右衛門

佐藤準助

海上安全

緊用

蕤包物一ツ添

地震記事に見ゆる餘震、鎌原洞山著、○著者ハ松代藩士ナレバ、是ハ其地ノ觀測ナルベシ、

原書、黒點の大小を以て強弱を分つ、元の眞を失はむことをおそれ、かけ寫しにす、

●十月廿二日夜九半頃震候節也、餘程強く、既に庭江

駈出可申程に御座候、其餘之印、大小にて強弱あり、

十月廿二日、七半頃●、夜九半頃●、六時前●、

同 廿三日、夜四頃●、

同 廿四日、明六半●、暮六前●、夜四前●、

同 廿五日、四ッ前●、八時●●●、七時●●●、入相●、

四前●、

同 廿六日、朝五前●、ナル、晝●、入相●、夜五時●、七

半●●、

同 廿七日、暮六●●、五前●、四過●、八過●、

同 廿八日、夜八頃●、八半●、

十月廿九日、晝四過●、八半●、

同 晦 日、夜九過●、八頃ナル、ナル、

十一月朔日、夜五過●●●●●、暫相立四ッ、

同 二 日、朝五過●、夜五過●、

同 三 日、夜四過●●、

同 四 日、四ッ前●、

同 五 日、夜八頃ナル●、

同 六 日、晝五過●、夜五前●、

同 七 日、明六過ナル●、九前●●●、八過●●、七前ナル、

夜五前●、

同 八 日、九前●、

同 九 日、六前●、夜九半頃●、

同 十 日、夜五時●、ナル●●、五半頃ナル、ナル、

同 十一日、暮六過●、

同 十二日、九前●、夜五前●、入相ナル、

同 十三日、無別條、

同 十四日、同斷、

同 十五日、夜八頃●●●●●ナル、ナル、

●●●●●、七頃●、

同 十六日、入相頃●●●●●、六半頃●、

同 十七日、明六過●、

同 十八日、暮六過●、

同 十九日、夕七半頃●、

同 二十日、明六時●、入相●、夜五前●●●、

同 廿一日、無別條、

同 廿二日、同斷、

同 廿三日、夜中●、

同 廿四日、明六過●、五過ナル、四前●●●、ナル、夜五過

●●●●●、四頃●、夜中●●●、

十一月廿五日、夜八前●●●、八ッ過●●●、

同 廿六日、此日無別條、

同 廿七日、晝七前●、夜七頃●、

同 廿八日、夕七過●、入相ナル、夜五過ナル、

同 廿九日、夜四過●●●●●●●●●●、ナルコト度

度、七頃貳●、

十二月朔日、六半●●●、夜七前●、七過●、

同 二日、五時●●、夜四過●、

同 三日、明六過●●●●●●●●●●、夜九半●●●●●●●●●●、

明六時●●●●●●●●●●、

同 四日、八時●●●●●●●●●●、

右之外、晝夜共附落し可有御座候、

十七日、夜四過●●●●●●●●●●、廿日●●●●●●●●●●、

廿四日七八度、廿六日夜●●、廿七日夜半過●●、晦日今曉三

四度、

御預所

信州高井郡、水内郡村々、去月廿四日夜地震之上出火、

民家變災御届書、

御預所村々、段々御届申上置候通、去月廿四日夜稀成大地震

にて、高井郡、水内郡村々、民家押潰、死失有之候に付、早速見分役人指出候所、別而水内郡權堂村之儀は、右地震にて皆潰同様之上、善光寺町々出火類焼、死失人等取調候處、左之通に御座候、

水内郡

村高六百七十石壹斗八升八合、

權堂村

總家數參百七軒、

一焼失家數貳百七拾四軒、

是は潰之上焼失仕候、

一焼失土藏并に物置之類、四拾八棟、

是は右同斷、

一居家三十三軒、

一土藏并に物置之類、十五棟、

右半潰相成居候、

一御高札場一ヶ所、潰之上焼、

但御高札は無別條、

一寺三ヶ寺、右同斷、

但明行寺、普濟寺、往生寺、

總人數千百六拾三人之内、

(死失人八十九人脱カ)

内男三十八人、
女五十壹人、

外百十三人、怪我人、

一貯穀、郷藏無之、身元宜ものへ預置候處、右入置候土藏、押潰之上焼失仕候故、貯穀不殘焼失仕候、尤追而無油斷積戻候様申渡候、

同郡

村高百五十五石六斗三升七合、

中尾村

一總家數貳拾七軒、

是は地震に而皆潰相成申候、

一土藏并物置類、三十壹棟、

一御高札場壹ヶ所、

但御高札は無別條、

一宮貳社、

右三筆、皆潰相成候、

總人數百貳拾八人之内、

死失人八人、

内男三人、
女五人、

同郡

村高四百五十五石二斗三升七合、

津野村

一總家數三十軒、

潰家數四軒、

此外銘々土藏、物置様之類、大破損仕候、

同郡

村高八百七石五斗五升七合、

栗田村

一總人數五百五十八人之内、

死失五人、

内男三人、
女貳人、

是は善光寺町へ罷越、止宿仕居、怪我仕候に付、早速引取、療用相成候へ共、相重り、死去仕候、

一居家并土藏、物置等、大破損仕候得共、潰家無御座候、

高井郡

村高九百三石五斗壹升七合、

大島村

一總家數百二十軒、

潰家數四軒、

右之外、土藏、物置類、大破損仕候、

同郡

幸高村

外十ヶ村

右は居家、土藏、并物置様之類、銘々大破損仕候へ共、潰家無御座候、

右者、御預所信州高井郡、水内郡村々、去月廿四日亥刻頃、稀成大地震にて、民家壓潰、死失、怪我人有之、焼失家、死失人共取調べ候所、書面之通に御座候、尤死失人之儀、見分相糺候處、焼死并に相違無之、外怪敷儀一切相聞不申、其上他村之もの無之候間、夫々取片付候様申渡、且川除村々、耕地は勿論、御普請所土堤、岸崩、地割出來、泥水吹出し候場所も有之候處、天氣故、其儘干上り、泥水吹出候儀相止、割口壹丈貳尺位、深二三尺有之、其上耕地一圓、田畑共高低出來、田方は水懸差支、畑方は容易に地平均出來兼、右様之次第にて、用水揚口關柵大破に付、追々用水肝要之時節に差懸り、旁土堤缺落、并關柵急破御普請被成下候様願出、役人差出、見分目論見罷在候、且兩郡村々、牛馬至而少く候に付、怪我一切無御座候、且又權堂村、中尾村之儀は、差當り夫食差支候間、御名手内々取扱筋早速手當仕候儀に御座候、則別紙權堂村龜圖相添、此段御届申上候様、在所役人共々申越候、依之申上候、以上、

未四月

座間百人

御勘定所

弘化四年丁未春三月廿四日夜四時過大地震、御用席登城、櫻之馬場に御用部屋立、無役席初差立、并に諸役人不殘登城、

御機嫌相伺、○御用席并御城代、晝夜詰切、但代り合休息有之、諸役人同斷、○初六七日之間、詰之者へ御賄被下、但握飯、香物、同所にて炊出し、御吟味役取計、其後銘々辨當持參、○一統火事裝束、指立以上鎗爲持、○一統居宅を離れ、假小屋に住居、本宅にて焚火無之、○廿五日、殿様詰合御供にて、内曲輪御見分有之、○二十六日、長國寺、大鋒寺御靈屋爲見廻、御中老罷越、御靈屋内、田がみ御位牌堂の御門倒る、○御開善寺、地震鎮之御祈禱開白、○上州邊并江戸表地震之様子聞糺の爲、中村安藏、馬上にて矢代邊迄罷越、○犀川壅塞、下流干上に付、水難防方爲指圖、賴母、小松原村へ罷越、郡奉行竹村金吾、山寺源太夫、磯田音門、御勝手評議役岩下萃、道橋奉行柘植嘉兵衛等、近村人足召連罷越、御代官山田兵次、手代召連、賄方取計、○同所爲取締、御先手鐵炮頭横田甚五左衛門、組同心召越、○犀川水上見分、御目付矢野茂、同加役石倉嘉太夫、御徒士館文之助、森五十三、○犀口の普請十餘日之間、千餘人の賄被下、味噌は搔立汁也、有司も其通り也、酒も被下、壹人前米二合五勺のならしにて、實は三合當也、是は御代官出て取計ふ、炊出し場所は、段の原の土堤の上と横とにほり、釜を七ツ併て炊出す、女役にて或は椀へ盛り、或は握り飯となし、味噌又鹽にて用ゆ、家潰れ、業を失

ひ、穀を埋て當惑せし者共、皆食に飽て難有がりしと云ふ、酒は市村塚田源吾獻上す、人毎に茶碗に二づゝ賜はる、○小松原御普請人足へ、延齡丹四曲、梅肉四曲御下、○犀川塞留之様子、追々お分り候に付、御供番、非常御供番共退出、○内曲輪晝夜火元廻、御奏者指立、家督分、曲輪御取次、御使役、御城詰、○定火消加役御役場方、御番士十二人、本役廿人、晝夜繁々相廻、○下目付加役入、夜廻り、○表御用人助、二の丸御留守居、○道橋奉行助、御預所郡奉行藤井喜内、御鐵炮方高野車之助、○地震翌日、町方御救、握飯二づゝ、廿六日、軒別に洗米二升づゝ被下之、○四月二日、山中筋爲御救方、御勘定所元メ永井忠藏、御勘定兩人、怪我人爲御救、徒士席醫師倉田左高、兩角玄脩、上山田村宮原良碩、矢代村宮島道澤、相越、○四月二日、大御門屋根瓦取下し候に付、通用留、喰違御門通用、○同月三日、町方見廻、舍人相越、町奉行金兒丈助案内、御目付矢野茂罷出、○四月四日、御用席今日々常服、奔走之御役人野服、火元見廻之ものは迄之通、○御家中破損所、當月中旬迄、書出し候様達有之、○四月五日、御江府上野常照院、二夜三日御祈禱、從 若殿様被仰付、今便御札到來、○同月七日、是迄諸士日々御機嫌相伺候處、地震追々相鎮候様子に付、四五日に壹度相伺候様達有之、○四月七日、火元見

(廻カ)
込、夜中は是迄之通、晝は相略、折々見廻候様、着服野服相用候共、勝手次第之旨、火元見廻之向へ達有之、御役人常服、野服勝手次第之旨、達有之、○町奉行、是迄晝夜町方へ出張罷在候處、追々締相付候間、出張相止、晝夜見廻可申、町役人火事服相止、常服相用、時々見込、伺之通申渡有之、○四月八日、戸隱山へ水災之御祈禱御頼、御初穩白銀五枚、○四月九日、地震水難消除、於舞鶴山御兩宮御神前御祈禱、今日々一七日、毎日、御側御用人、御代參相勤、○殿様、詰合御供にて、町方之様子被遊御覽、○四月十一日、江府々切昆布四個、鹿角菜五俵、昆布之把、目差鰯貳千四百串、到來、○四月十二日、御奏者、家督、并御城詰、夜廻り兩度、風烈之節は、是迄之通、御取頭、御使役、夜分廻りに不及、但風烈之節、是迄之通、○四月十三日、御守役中□□左吉、從 御前様爲御伺被指遣、○四月四日、從 若殿様御守役常田三郎被指遣、御伺有之、○内曲輪にて、屋敷々々夜中時廻り拍子木打、五月に入、追々相休、○大御門太鼓、地震後鳥居御門土居にて打候處、四月十一日々、以前之通御櫓にて打、時之鐘、地震以後於大英寺撞候處、十一日々、以前之通片羽にて撞、一四月十三日夕七ツ半頃より、西の方水音相聞、依之御目付兩人、小使召連、竹山へ上り、時々注進、山寺源太夫、柘植

嘉兵衛等も同所へ罷越、○寺尾舟場へ道橋奉行罷越、○大鋒寺武靖公御像、金井山へ御立退、御番頭原彦左衛門、壹組引連奉守護、大鋒寺へ道橋奉行、御目付相越、○長國寺 御靈屋尊牌、本堂へ御遷座、御番頭河原左京、壹組引卒奉守護、○御役人御預御道具、夫々始末、○御立退手配有之、御供相揃、水之様子に寄、大林寺、或は開善寺へ御立退之手配有之、○金兒忠兵衛、赤坂山へ上り、差上水口見切候節、二ツ玉揚火、○御徒目付原田糺、西澤甚七郎、暮時小市村へ引取注進す、○御茶屋前土手(常水より、日暮に及び水次第に逆流し、西の半頃には、下の方より外の御堀へ入る)下六尺程に水付、右に付、上下水の手へ、御番頭、御番士召連相詰、○夜九時過より差上水追々引、○諸士御機嫌相伺、○土堤低き所へは、急難除の土俵を積て防ぐ、今夜詰合大儀致候ものは、酒被下、○夜九ツ時過、岩倉拔御見分、御目付加役石倉嘉太夫、御徒士館文之助越、○十四日、今晝時武靖公御像、金井山より三本松通り寺尾福德寺へ御立寄、女田町通り眞勝寺へ懸り、長國寺本堂へ御遷座、御番頭原彦左衛門、壹組引連、御目付禰津刑左衛門、小屋喜平太御供、○長國寺へ 御遷座之上、御代參、御中老赤澤助之進、○十四日、御用席今日野服、○犀川湛水決出、常水に相成候に付、御役人詰切に不及、晝之中相

詰候様達有之、○御席、以來朝五時出仕、暮時退出、○十五日、川中島川東村々御締、隱密穿鑿御用、御先手横田甚五左衛門、御目付禰津刑左衛門、小野喜平太、矢野茂、齋藤友衛罷越、附人兩人、足輕三人宛、○差立以上、伺御機嫌壹種宛獻上、今日より追々獻上、○是迄御賄被下候向、今日より不被下、但定火消へは被下之、○小屋掛材木、藁等、頂戴願出候村々へ被下之、○山中筋荒所見分、御救方取計、郡奉行山寺源太夫、御目付小野喜平太、御勘定役兩人、根岸通村々へ御代官長谷川源美、中山中筋へ郡奉行磯田音門、御目付矢野茂、川北へ郡奉行竹村金吾罷越、何れも數日懸る、米、味噌持參、○鹿谷湛水見分、御勝手方評議役岩下草、御徒士目付原田糺、○水災後、村方極難之ものへ御手充、潰家貳百足、半潰家壹分二朱、潰家流失三分、凡そ金千七百兩餘、○水災後、小松原村、八幡原、北高田村、東河田村、四ヶ所御救小屋立、炊出し三ヶ日粥被下、極難之者へは、其後十日程の間被下之、○十五日、舞鶴山御祈禱結願に付、御名代鎌原石見、○十六日、町方鍛冶、糺屋等、指支之向焚火免さる、豆腐屋は上旬に免さる、○十七日、定火消加役御免、定役平常之服にて、平常より繁く相廻候様達有之、○御奏者指立、家督、并に御城詰、夜廻に不及、○御用部屋、今日も四時立、○十九日、朝六時 武靖

公御像、大鋒寺へ御歸座、御番頭原平馬、御番士召連、御目付馬場孫三郎、岸太五之丞御供、四時大鋒寺へ御代參、源原舍人、○長國寺尊牌、御靈屋江御歸座、御供十四日之通、○居宅にて焚火勝手次第之旨、達有之、町方同斷、但錢湯、暫見合、○此度變災にて壓死、溺死之者共、御不便被_レ思召、來る廿八日、岩野村妻女山に於て、爲亡靈大施餓鬼修業、御菩提所長國寺へ被_レ仰付候、其旨相心得、參詣致度ものは、可爲勝手次第旨、觸有之、長國寺へ御布施銀五枚、○右に付、寺院志次第、施餓鬼仕候様、演達有之、○廿八日、妻女山施餓鬼、參詣多有之、○廿八日、御玄關向御普請出來候共、諸御禮、暫之内不被爲受旨被仰出、五月飾のぼり無用之旨、達有之、廿八日、此度災變に付、金壹萬兩御拜借被蒙仰、○廿八日、廿九日、日色純赤、雨の兆と云、○兩宮神事、廿三日の所、御札指出候のみ、御城下へは不參、○廿九日、善光寺吉祥院、先年御造立之御石碑、并屋根等、其上頂戴罷在候墨付、燒失、恐入候旨申出、○五月三日、災變に付、御領内爲御撫育、御參府、秋中迄御用捨、御願之通御差圖有之、○五日、端午之御祝無之、蓬、菖蒲は如例、○五月十日、御玄關御修覆出來に付、御番頭、番士、外表御役人、本詰所へ引取、假屋引拂、○文武稽古、指支無之向は、稽古可致旨、達有之、○五月十日、定火消廻

り、今日々平常之通、○金井御普請出來、○水道役、地震之砌御家中破損所見分有之處、尙又五月十一日、再見分有之、○木戸七ヶ所、地震以來、夜中開き有之處、五月より平日之通、○町方錢湯、五月四日より免さる、但朝四時より夕時迄、○御家中、在町共、居宅破損有無係らず、一統假小屋懸け、寢食致し候所、四月末より、追々假小屋引拂、本宅に移る、○山中筋破損見分として、御勘定直井倉之助、松倉忠四郎様、御普請役三人、吟味下役壹人、御勘定方用人、同侍、下夫、小者到着、小松原村へ郡奉行竹村金吾、御内使者相勤、御遣物に下物有之、山中筋案内、道橋奉行柘植嘉兵衛、○右の衆、越後へ參られ、五月廿一日、國役御普請に付、當又被參、依之御使者白井初平を以て、白玉粉壹箱づゝ被遣之、○三月廿四日夜大地震後、毎日晝夜大小の震動數不知、廿九日明六時大震後、毎日晝夜大小の震動數不知、廿九日明六時大震、尼變山石崩れ落、其中五間程の石、加賀井村畑中へ落ち、三ツに割、東條東光寺前へも大石落、中町にて潰家有之、晦日暮過、大震有之、○三月晦日、晝夜にて大小百度震有之、其後大小は有之候へども、追々間遠に相成、

○長國寺御墓石皆倒、其外御城下寺々の石塔、多分倒る、

○去年丙午の冬より、丁未の春へかけて、御城下町の子供、
専らうたひし歌、

宵に忍ばく、脊戸から忍べ、表くどり戸は、

ぐはらくびつしやり、音がする、

是は二十年前、はやりし歌也、

○變災に付、死人、潰家等之調、日々増減有之、

遠方は追々届出候故相増候、或は他所へ遁れ行居候分、村
役人死失と心得、死人の數に入候處、其後歸來り候者、訴
出候に付、減に相成も有之、

三月廿五日々、同廿八日暮時迄、

一死千九百七十三人、

一怪我人六百八十壹人、

一斃馬五十六疋、

一潰家三千九百七十壹軒、

一半潰家九百七十一軒、

一御高札場、并堂、宮、其外社倉藏之類、村方申立不分明に
付、調相除、追而取調可申上候、但多分口上訴に付、都而増

減可有御座奉存候、

五月朔日、

一死人貳千五百九十四人、

内男千貳百四十三人、
女千三百五十一人、

一怪我人千百廿二人、

一斃馬二百六十四疋、

一斃牛六疋、

一潰家六千、

一半潰三千廿五軒、

一居家焼失十四軒、

○水災に付流死廿貳人、

五月二日調、

○地震前にドロ／＼と雷の如く鳴り、後に動く、或は鳴音の
みにて、動きなきもあり、或は鳴音なく、直に動くもあり、

○鳴音、河所にては聞えず、御城下より西條邊高く聞ゆ、西
條にて山に上りて聞時は、下に聞ゆと也、

○山中瀬戸川村の谷川、常は水細し、此度地震の時、古山寶
藏寺の山崩れて谷を埋め、水湛へ、追々溢れ、半里四方程に
なり、湖水の如く見え、水入の家多くあり、四月廿四五日頃
迄、村民切ひらくと雖も、一日僅かに三寸五寸づゝならで
は、水引かね、難澁すと云、

○地震の夜、小松原の民四人、一同に逃出し候處、地坼、其中
へ陥入り、上ること能はず、當惑せし内に、下より水吹出、其

水と共に吹出され、出ることを得て、命助かりしと也、

○地の裂る處、大小長短深淺定らず、廣き處は飛越る事能はず、深きは底をしらず、裂たる所水を出すもあり、又裂たる儘なるもあり、又地陥りて數十丈の外へ其土を吹出し、小山の如くなるあり、

○水災の前、川中島の村々、山手の村親類縁者を頼み行もあり、又清野、寺尾、鳥打、赤坂、金井山等、寄合々々小屋懸して、水難避く、赤坂山に小屋五十餘あり、其中にて出産せし婦人、四人ありしと、

○水内橋の材木、川中島中津邊まで流れ來る、

○四ツ谷村中島といふ所に、行人塚といふ塚あり、玄海と云山伏、入定したる所といふ、此度水災にて塚上の大榎倒れて塚崩れ、全身の死骸出たり、兩手を組、膝を折て、皮膚枯木のごとく見ゆ、丈六尺に近し、上氷鉋村唯念寺の間に取入れ、長持に入置、參詣の人多しと、玄海定に入しは、百年前の事も、塚を玄海塚ともいふ、佐久間象山、詩あり、

丁未首夏、地大震、山崩壅峽、犀水爲之渟滯、十有九日、一旦潰決、其所衝阡陌廬舍、蕩滅無餘、水退後、砂上有一老翁屍、若久在塚中、遭水衝而出者、而支節聯屬、不異生

人、惟肌肉乾枯、如樹皮耳、朱子云、修養終天年者、死而不腐、料此類歟、土怖、送氷鉋村佛寺、余往見、得二詩、

之子何代人、冥棲黃泉底、千載闕幽戶、不圖至今啓、龜摧衣衾空、肌骨完不毀、強矯椿姿、清堅金石體、無是尸解仙、遺脫乃如此、

齊桓伯中國、威神加四方、疆域抵海東、富有逾天王、宮殿何崔嵬、裳衣何炫煌、侍立多明艷、四座生奇芳、豐膳飫大牢、樂飲醉瓊漿、歌舞養聰明、田獵希寧康、臣獻千年頌、賓稱萬壽觴、尊榮極昌熾、時人仰餘光、一朝蒙殃死、七旬委在床、尸蟲流戶外、遺臭永不匹、何如老子、千歲金骨香、清濁自殊途、迷者眞可傷、

○犀川、千曲川落合、一筋に成て、越後に入ては信濃川といふ、岩倉の決潰にて、越後も川添の村里、水難あり、小千谷邊は高き所なれども、水付しと云、新潟にて海に入處、凡水崇平水々一丈増したりとぞ、

○五月七日、妻女山に於て大英寺施餓鬼あり、參詣群集す、

○同月十三日、右同所に於て大林寺其外十餘寺寄合、施餓鬼あり、外諸宗の寺院、思ひ／＼に寺に於てするもあり、山へ上りて修業するもあり、追々に追福す、

○同月十四日、中堰普請出來、今夕七時半時水入、同日暮時過、上堰、下堰、小山堰水入、

○同月十八日、恩田頼母、川邊見分あり、郡奉行、御勝手評議役、道橋奉行等罷越、上高田村に止宿、翌十九日晝過歸宅、

○四月中、越中之白山焼にて、震動有之やの風説有之、依之早道之者、越中迄聞合に遣候處、山焼は無之虚説のよし、往還三里は、一時三里十三町餘づゝ當る、早道の者鼠宿村庄之助、三月晦日出立、越中富山へ四月三日着、立山の麓迄参り、七日暮時歸着、

○飯山領吉村、山崩れ、泥水押出し、一村泥の底に埋る、但し少し村の中隔りたる家十一軒は残る、是も地震にて潰れ、立ちたる家はなし、埋れたる四十餘軒は、家内も皆埋れ、唯近村へ行たる者壹人耳残ると云、其後親類ゆかりの者共、心あてに此邊に埋れたるならむと、其處此處を掘りしに、三丈餘ほりて、漸く七人の死骸をほり出したり、簞笥を壹ツ掘出し、引出しを引出し見るに、衣服其まゝなるが、火の如くあつく、衣服を手を取れば、ぼろ／＼と皆潰れたり、又掘る中より、火もえ出る所もありと云ふ、埋りて十日めに、家三軒掘出す、三軒にて家内十五人の中、二人生て、残りは皆死せり、生居たるは、味噌を食て居しと云、

○藥山藥師堂、俗にぶらんと藥師と云ふ、岩山より壹本の柱(こカ)

を横さまに出し、それによりて堂を造りたる也、本尊の在す所は岩窟なり、此度の震災に山崩れ、堂は下の谷に顛倒し、唯右の柱と椽類残りあり、藥師は岩窟中に依然たり、但本尊は石像にて、長四尺に足らぬ、常は善光寺の堂にあり、山には前立の藥師を安置す、今窟中にある所は、前立の像なり、

○藥山の麓に、クソーズの油出る所あり、地震にて埋れたる、

○善光寺火後、死人の骨をあつめ、俵に入たる五十壹俵有、是を山門の東北の方に埋め、誰れも知れる死骸三百三十餘あり、堂の後に埋むといふ、

○壓死多き村里は、夜中鬼の泣聲有て物すごく、戸外へは出兼ねるよし、善光寺なども同じ、山里は夜中鬼火多しと云ふ、

○鹿谷村高地澤湛水、五月廿六日晝時々大雨にて、廿八日朝六半時、壹尺越水のよし、注進有之、

○三月廿四日夜の地震、廿七日には、江都にて大略を板行し、よみ賣せしと云、其後地震水難の場所圖面を板行したる、幾通もあり、又錦畫にしたるもあり、

○善光寺大災に付、三月廿六日、御勘定、役人召連罷越、寺役

人へ懸合、當座御供米四十八俵、且往還筋石瓦取片付取計、廿九日迄救方世話いたし、夫々小松原の方へ罷越、其後善光寺、尙又五百俵拜借す、

○三月廿四日の夜、御代官の手代鈴木藤太、山中念佛寺村臥雲院に止宿し、是は近日山中筋御巡視あり、此寺に御止宿の儀により、内見分の爲出張、庫裡の方上の間に居り、燈下に書物してありしに、西北の方より怖ろしき響すると思ふ間に、震動甚敷に打驚き、東之方の庭へかけ出る程に、庫裡ははや潰れぬ、庭なる圍の塀の下(にカ)の風透の簀垣あり、片端破れたる所を潜り出、南の方高き土手へくらがりをつたざりたれば麻畠あり、廣さ十二三間なり、其畠中に一抱程なる木あり、則其木にとり付て居たるに、麻畠の中より何物やらん這来る、近寄るまゝに能見れば、此寺の庫裡婆の、赤裸にて逃來りたるなり、其中に取付たる木動き出し、暫時に壹丈ばかり土共にぬけ下り、足も止らざる故に、其所を駈出し、不圖山門の邊に名高き二本杉の事に心付、此木こそと、(はカ)いかなる拔覆りにても危き事はあるまじと、彼杉を尋て行見るに、外の木共多く倒れ重なり、右の杉は見えず、さらば此杉もはや押倒したるかと思ひ、常は右の杉に並びありし觀音堂を尋ぬるに、堂は見上る程高き所にあり、扱はいつしか地につれて下りたるなれと驚き、堂を志して上りぬ、人聲

聞ゆれば、彌力を得て堂に上り着て見れば、此處は拔覆りなく、堂庭平かなり、寺の和尙をはじめ、居合せたるもの共は、庫裡の潰れたる下より危難を遁れ來りたるなり、村中の男女も追々に來れり、藤太思ふに、地震に家潰るれば、火事あるよし、今夜一統の地震ならば火事有べしと見る中に、先此寺の庫裡の方より火もえ出ぬ、其中遠近數ヶ所、火氣見えたり、扱は地震なりと始めて知りぬ、扱寺は見るが中に燒ながら山拔下り、遙の麓に下りたり、又夜すがら虫倉岳、萩が城邊に當り、岩石拔崩るゝ音、幾千萬の雷落かゝるが如く鳴動し、怖ろしき事言ばかりなし、爰に集り居老若男女、何れも生たる心地なし、其中に村中の醫師玄理といふ者の子利左衛門なる者、臥雲院にて地震に逢ひ、急ぎ家に歸り見れば、家は已に潰れ懸りたり、我壓死も厭はずかけ入て、母を脊負、觀音堂に入り來る、藤太其志を感じ、皆々にいふ様只今此處へ孝子來りたれば、天道の助あるべし、もはや此處拔崩るゝ事あるべからず、皆々心を安んじ候へとて、一同の夜の明るを待ちぬ、已にして東方白みて夜明ければ、人々氣力を得たり、實に天の祐けなりしか、此邊悉く拔崩れて、中に此堂庭ばかり堅固にして、凡五六十人の者命を全ふせり、人々皆空腹なり、あたりを見るに、堂より下の方に半潰の家あり、此家

より米壹升あまり持参り、釜に入火を焚居る中に地震し、釜の側の地裂けたり、人々驚きたる中に、藤太空腹にては何事もならずとて、釜の中のなま米を掬して立出ぬ、村役人藤太が行べき路を兎角と心配するを、藤太見て、自分は松城○松代城ノコトの方へ立退くなり、皆々は家内のせわして怪我せぬ様に路を求めて行べし、必ず自分にかまふまじと云て、岩草村の方をさして出ぬ、村人道しるべせむとて兩三人先に立ちて行まゝに、路もなき處拔崩るゝ中をはしり行に、先なるもの陥る時は、跡のもの助け、跡なるもの陥る時は、先なるもの手を取りて引あげつゝ、辛ふじて此村中みのぶ組と云所まで行て一息つきたり、又急ぎて岩草村なる松乗寺の門前にゆきて、潰れ残れる家に立寄る、是は此村の組頭の家なり、是にて休み、人心地になりたり、あるじ蕎麥がきをして人々に振舞ふ、又神酒の残りとして酒を出す、藤太辭しけれども、もてなしに出せしにはあらずと申まゝ、其酒少し飲て氣力を得、此所より念佛寺村の人々をかへし、初め一同に立退し松城近在の黒鍬の者兩三人と共に、爰にて野支度とくへ、草鞋をはき、身輕に立出、橋詰村、五十平村、坪根村、宮野尾村、吉窪村等、大拔の難所を越、小市の渡しを渡し、蘇生の心地して、松城に歸りしとぞ、

○六月十一日、今日々御用部屋、平常之通、於御殿相立、櫻の馬場御役人、假小屋引拂、○大御門、屋根御修覆未相濟候に付、諸御禮、未被爲受、○御中老玉川左門、赤澤助之丞、大目付海野藏主、玄關修覆未相整候間、諸士廻勤相控、○地震の時、地拆けて吹出したる土砂泥、甚臭し、水災の時水入たる家の、水引し跡に残りたる泥も、同じく甚臭し、○今夏、例年より蠅多し、○岩倉、藤倉の崩落たる時、安庭村明るくなり、屋の内隅々まで晝の如く見へしとぞ、○岩倉の拔たる時、跡にて十匁玉程の鐵炮の音度々あり、湯氣の發するならむかといひり、○伊折村白岩山崩れたるは、ぬけ口より麓まで七八町、夫より又五六町も土石押流したり、麓は溝の如く掘れて、深さ貳丈許りの所もあり、其水溜りを踰て押出し大石夥しく、中に横十二間、高さ七八間なるあり、横五七間、高さ三四間なるあり、伊折村の中、壹組、家數十軒、人數四十餘人、皆土の下になる、右五七間の大石の下に、弓張提燈壹つ、草鞋壹足、かいまき壹つ見えたり、村中壹人、此かいまきは、姉様のかいまきなり、然れば姉様の家は、此所の土中なるべしとて、石の下をひたすら掘りければ、果して姉の死骸を掘出したたり、其外はつるに掘當すと云、○祖山村の山拔は、伊折ほどの石はなし、此山、杉其外大木多く立籠たるが、崩たる

時、一抱ほどの木、三四尺ほどに折挫けてあり、外山拔は大木倒れたるも、多くは其儘なり、祖山の如く折挫けたるは少し、○山中筋見分の御役人、村民を厭ひ、止宿は野の積りにて、小夜具、兵糧米、味噌を持せ行しが、小屋を取立るには、人足遣ひもあり、又村民に尋聞事、申諭す事など、皆小屋にて呼來すなれば、却て村民を煩はす事あり、依て野陣は不用、潰れざる家に入て、持參米を炊ぎて巡行せしとぞ、○朝日山より崩れ落ちたる石の中より、羅紗の毛の如きもの多く出たり、色黒紫にて光あり、○六月十三日、地震間遠に成り、晝夜小三四度、音ばかりの時もあり、又少しゆるる事もあり、今日は小ゆり度々の中、晝兩度少し強ゆり、夜中も一度強ゆり、三四度小ゆりあり、都合十二度なり、○穗刈村安光寺の鐘、大形にて百貫匁以上の重さなり、鐘堂も丈夫造りなり、岩倉の堰留湛水の時、此鐘堂其儘流れ下り、一里程隔たる上條村の邊に漂ひしが、風に吹れて又歸り上り、安光寺の邊に來りたるを、大木に繩にて繋ぎ留置たり、然るに岩倉決潰之時、水引て鐘堂顛倒し、屋根は流れ去り、堂の柱逆さまなり(に脱カ)て在り、鐘は落けるを引あげてつなぎ留しと、○安光寺は水底に在る事、二十日ばかりなりし、水引て後、井の水少しも濁りなく、元の如く清潔にて、増減もなしとぞ、○上條村源

信寺の鐘も、水中に漂ひ、諸所めぐりしが、(是も)繩にて繋ぎ留しと云、○臥雲院、大地震の夜、數町麓へぬけ下り、堂宇は其まゝにて破壊せざりしが、火燃え出で焼失しぬ、然るに庭の木石并に池など、其まゝにてぬけ下りたり、但地面縮りて、少くなりしと云、○外鹿谷村の内柳の窪と云は、十四五軒の民家あり、數町下の方へぬけ下り、岩山の麓へ押付、十二軒は火に焼けうせ、其餘の家居は、其儘にて破壊せず、元の所に小社ありしが、其社は其所に止り、元の如くにて、民家(遙カ)とは隔かに隔り、其間其五百間程の處、田の畦、程よくぬけ下り、地面廣がりたり、是は伸地とも云んか、但此類は稀の事にて、縮地は多くあり、○穗刈村大太川、常は神田川程の水なるが、山崩れ土石落ち入り、其上へ大石七八間に五六間、高四五間なるが落ちて、流れを塞ぎたり、切割にもならざれば、石工に命じ、石の片端をほり、川筋を片寄せて道をつけ、水を流したりと云、○穗刈村、穢多の家廿軒ばかりある所、がけ崩れ、家居も人も皆土の下に成しが、女壹人如何してかのがれ出でたり、其子九歳になる男子ありしが、是も土中に埋れしに、廿八日に至り、其母其邊に來りし時、土中より母を呼びし故、いそ聲を目當に土を掘りければ、男子生てあり、少しの怪我もなかりしとぞ、土中にありしこと、五

震災豫防調査報告第四十六號

乙

(山名ヲ脱セリ)
日なり、○水内橋の北の岩石にて、石の間は黒めの土なり、此山、日々に少しづつ崩る、其崩れかた、外山とは異なり、俗につむじ風と云、山の野火の跡など、灰をぐるぐると少さく卷て吹上る如く、石をころくところばし落す、其落方少し落て留り、又ころくところばし留りして、つるには犀川に落入、毎日右之如くにて、六月下旬に至りても、いまだ崩止らずと云、

○加賀井焚湯の出口、廿四日の夜、泥水六尺ほど吹出し、廿五日の朝は三尺程に成り、廿六日五七寸になり、日を追て元の如くぶつ／＼湧出るのみ、○四月中、犀川干上りの時、水溜りの所にて、川邊のものども、鱒、鯉、鯰、鱧の類、多く捕りしと云ふ、○此度の洪水、高井郡に至りては、寛保の洪水より、水嵩六尺低しと云、○上野村明松寺、御領内御巡見の時、御本陣なりしが、一搖に地裂けて、本堂も庫裡も潰れながら、裂目に陷入、其まゝ裂口塞がりしが、頓而大勢來り集り、掘出しけるに、土中に陥りし者怪我もなし、中より物を取り出すに暗き故、提燈ともし出入せしとぞ、○茂萱村の靜松寺、臺所の隅に馬屋あり、其側に徳風呂を居てあり、中間爺、此風呂に浴し居けるが、其所のみ拔下り、遙の谷に落けるが、湯もあふれ出る事なく、中間も浴せしまゝにて落ける、馬は

驚き、谷を越寺に戻りしと云、本堂は大破し、庫裡は潰れかかり、且裏手の山拔落て、堂へ押かゝりしと云、○上松昌禪寺、一搖に潰れて、住持も壓死せり、○地震に付、四月廿三日、飯山侯三千兩御拜借、四月廿八日、須坂侯金子五百兩御拜借、六月十四日、上田侯三千兩御拜借有之、○四月廿八日、松代侯金壹萬兩御拜借、外に其郡代金壹萬兩、御借用有之、○關谷川、神田川、例年夏の間は水細り、關谷川は竭る時も間々あり、然るに今年は、夏日も替らず水太し、或曰、地震にて水裏變じ、坂裏へ出る水、此方へ向きたるならんか、○大御門、瓦屋根御修復出來、六月晦日々通用有之、○御家中銘銘の御知行所、變災に逢候者へ、手充遣すもの往々あり、河原氏にて手充、

安庭村二十石、

潰六人へ金貳分、半潰四人へ金貳朱、極難澁壹人へ金貳朱、死失三人宅へ線香三把、村方十三人へ酒代百疋、

吐頃村六石五斗五升、

潰二人へ銀十匁、半潰九人へ錢壹貫文、八百文、極難澁者四人へ金貳分、中難澁者壹人へ銀五匁、死失二人宅へ線香二把、外今年の不役金(賦)より壹分、村總割にして遣す、

同心或は出入の者丈遣し、追て索麁、干物の類遣す、

○七月五日、御家中へ御目付演説、

暫之内諸御禮不被爲請候旨、相達置候處、猶相達候迄は、以來節句、月並共、四時登城、御機嫌相伺可申候、

但節句、月並、是迄不致登城向は、是迄之通、且病氣其外差合之面々、不及名代、且又節句、上下不用着用候、

○七月七日、御機嫌伺、御兩書院諸士へ被遊御逢、以後、式日も同様伺有之、

○七月廿日曉七日強震、鍛冶町邊、戸障子倒れたるもあり、田町邊にて鴨居落ちたるもあり、御曲輪中、此程中修復ありたる壁われたるもあり、此時上田も同様にて、町方のもの共、皆々庭へかけ出たるとぞ、○八月朔日、御祝儀無之、諸士登城、御機嫌相伺、但御逢可被遊處、御頭痛に付、於御用部伺有之、

○川除御普請、七月廿八日、於江府被蒙仰、

眞田信濃守

其方領分信州村々、地震に付、堤、川除、破損所之儀、當時之水行に隨ひ、古形に基、相當之御普請被仰付候間、得其意、委細之儀は、御勘定奉行へ可被承合候、

右阿部伊勢守様江、御留守居御呼出、御達有之、

○八月三日、天真院様、三十三回御忌御法事に付、長國寺へ御參詣有之、但變災後、初而御出有之、

○山中湛水の時、舟を流すまじとて、木に繋ぎ止置しが、水引たる後見れば、高き山の木の梢にかゝりあり、是を木より下し、林の中をやうやく引下して、川邊へ出せしとぞ、

○稻荷山組物師某、此度地震水災に遭し郡郷を圖面にして上木し、信濃國大地震火災水難地方全圖と題す、圖の大き東西壹尺三寸七分、南北貳尺八寸五分あり、此者、京都正親町殿へ出入するに付、此圖を卿の一見に備へしに、計らず今上の叡覽に入しとぞ、○山中日名村、蟋蟀夥しく出で、黍、稷を喰あらし、又人家に入り、蚊帳を喰破り内に入り、あぶら垢のつきたる衣服、夜着の類を喰ひ、或は小兒の手足に喰付、村中大に患とす、ひろひ捕へんとするに、はね廻り、捕り得ず、元來變災後、假小屋住居藁多く敷、其上蓆を敷たる故、蟋蟀右の藁の中へ逃れ入り、捕兼たり、箒などにて打ても、上柔かなる所にては死せず、往來道筋へ引出し、打付れば、土堅き故死す、一所にはき寄て火にて焚くとすれば、はね上り飛去り、何分手に餘るとぞ、因て御役人差圖して、近村々人足を呼寄、一度に捕らせんとするに、多勢入込時は、わづかに残れる黍、稷、皆踏荒さるべし、然らばたとひ虫は盡て

震災豫防調査報告第四十六號

乙

も、又食物に難儀なりとて、人足を呼ぶをば、村民訴訟すとも、因て村中にて成べきほど精出して捕ふるより外なしとぞ、是は水災にて麥の刈残し水に付て腐れしより、生ぜしならんかといへり、近頃は隣村にも移りて、平素より多し、但し日名村の如く害をばなさずと也、八月初旬之事也、○八月六日の夜中、例の響き凡三十餘度あり、此あとは大震にもならむと氣遣しが、何事なく、翌七日夕七時半頃、強震あり、且長し、此時清瀧の邊、石三四ヶ所ぬけ落、其邊に薪を束るゝとて、薪の上に居し者、ゆり落さる、御城下に新にぬりたる壁われ、築立たる土藏の石垣など、搖崩したるもあり、

○八月、諸御禮來る十五日より被爲請候旨、被仰出、

○八月、此度の變災に付、三ヶ年間、萬端御儉約御省略に付、御家中にても其旨心得候様被仰出、且着服供連等之事に付、御手充筋、早々仰出されあり、

○八月十五日、變災後初而月並御禮被爲請、初而之御目見、家督之御禮等有之、但御目見は無之、

○七月廿日、煤花川湛水決潰、川邊川缺、石砂入、水押之村、廣瀨村、組小鍋村、國見組、茂菅組、市村組妻科村、中之御所村、○入山村、七月廿日以來、引續白雨に而、覆之地所出

來之旨訴出、七月廿五日、

○八月廿二日、夜八時、震強く、引續き三四度あり、町方にては皆町中へかけ出たりと云、此時箱清水にて倒家五六軒ありと云、虚實如何にや、

○七月十一日、御家中地震にて居宅破損の者へ、御手充金御借被成下、

本潰、百石に付、金拾兩、

半潰、百石に付、金七兩、

大破、百石に付、金五兩、

御禮金御免、來申年より丁年賦返之、

尙相願候者へは、御禮金壹割にて、右高割丈、御借被成下候旨、

九月朔日、御側醫へ御意、

○大地震の時、岩野村邊地拆けたる所より、水夥しく出、往來の人の膝節までどゞく程なり、但夜の中に水引たり、東川田村も同じ、或人の田地拆けたる所、湯氣盛なれば火を發し、陰氣盛なれば水を發するなるべし、岩野邊より川田村まで水を發せしを見れば、此邊より東松城の邊は、陰氣發するべし、さればこそ火難なかりし、山中より川北邊は陽氣發

せしが故に、虐燔多かりし、

○山中何れの村か、一ゆりに家潰れしが、亭主遙か隔りし所へ刎飛され、落る所地拆て、其中へ陥りしが、陥るとひとしくかけ口しまり、首のみ外へ出て、肩より下は土中に埋り、出る事能はず、あたりを見れば、程近くに童子壹人居たり、能見れば我子なり、いかにして爰に來りしぞと問に、いかにして來りたるやと答ふ、然れば此童子も父と同じく刎飛されたりと見えたり、授童子に我を掘出してくれよと云、童子十歳ばかりなるが、何もほるべき道具なければ、手にてしきりに土をほりあげければ、程なく肩のあたりまでほり出たり、夫よりそろ／＼手をぬき出し、やうやく全身ぬけ出し、家内のものは、皆屋の下に壓死せしとぞ、

○山中何れの村か、家の後は山畑にて麥あり、前は低くして田なり、地震の時、麥畑其儘にて、水田の中に在りし、

○御領分水内郡村々、煤花川堤、川除、破損所、此度限御普請御願之通、去十二日被蒙仰候段、九月十八日、御目付演説、

○雇足輕大岡村の産新左衛門、此度變災の地圖仰付られ、仕立差出す、松本、飯山邊までも、委細に彩色分にして出す、御參府の時御持せあり、新左衛門は樹藝方手付也、

○職人拂底にて、村里小屋掛も出來兼候に付、御郡方より上田御役人へ懸合、大工百人御借入、八月廿日(より脱カ)九月十一日頃迄、凡廿日程、村々へ借し渡し、皆々御借し人に相成、

○八月廿八日、爲御參勤御發駕、土口坂道惡敷に付、妻女山越御通り、岩鼻も御除、西の方畠中御通行有之、九月四日、御機嫌能御着府、此度御供方、御減少有之、

○大變以後、坂裏より地藏峠通り、馬にて米俵を松代へ送り來る事夥し、四斗入り二俵を壹駄とす、夏の間は日に八十足程つゞ來る、六月より少し減すと雖も、五十足のかけたる事なし、但雨天泥途には見合せて來らず、壹駄代金壹兩にして、日々五十金を持去ると云ふ、又材木、板の類も多く來る、馬荷(カ)の筏にして筑摩川を下す、夥し、上は中仙道和田嶺より出すといへり、

○坂裏、禰津、二千石の地にて、二百兩の金子、例年より餘計に得たりと云ふ、